



道 求

號四第

卷參第

(行發日一回一月每)行發日一月五年九卅治明

可認物便郵種三第 日六廿月三十年一卅治明

求道第參卷第四號目次

求道

◎自覺の問題

◎罪の自覺

◎救の自覺

感謝

◎落花無常 ◎庭前の雜草 ◎五兄弟 ◎人道佛道

◎眞正の慈憂

講話

◎大覺

聖傳

◎チカータカ釋尊得——修行

告白

◎獲信

研究

◎親鸞聖人著書の特色

講義

◎歎異鈔——第一章

嘆咏

◎春の一日(長詩)

◎思を述ぶ(長詩)

◎行く春(短歌)

紹介

◎國運と信仰 ◎靈魂論

時報

◎降誕會 ◎求道學舍近況 ◎求道會講話題

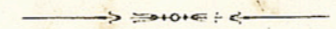
左千尺
甲之尺
八風

每日 午前九時
求道學舍
(本郡森川町一番地)

每土曜午後二時
第一 求道會
(九段坂佛敎俱樂部)

每月二日午後六時
第三 求道會
(日本橋蠣殼町敎所)

講話



訂正三版
眞宗聖敎大全

凱旋紀念特別大廉價廣告

半紙形上等洋紙 印刷鮮明 葛布表紙日本綴製 花色裂地帙入
 体裁頗美麗にして堅牢 全部三册 紙數約貳千五百頁
 定價金五圓也 製本既成着金 即日發送
 特別大廉價金貳圓(三十九年四月一日より) 小包送料參拾錢
 (三十九年七月卅一日迄) 小包引替小包は總て金拾錢増し

上卷目次

(和文の部)

願淨土萬寶數行信願文類。淨土文類樂鈔。淨土三經往生文類。泉誠眞願銘
 文。一念多念誦文。唯信鈔文意。未登鈔。御消息集。歎異抄。口傳鈔。
 改邪鈔。執持鈔。本願鈔。願々鈔。最要抄。拾遺古德傳繪詞。慕歸繪詞。
 最須敬重給詞。淨土眞要抄。諸神本願抄。破邪顯正鈔。敎行信證大意。
 顯名鈔。決智鈔。存覺法語。持名抄。女人往生聞書。步船鈔。報恩記。
 法華問答。淨土見聞集。正信偈大意。蓮如上人御一代記聞書。實悟記。
 蓮如上人遺德記。反古集。唯持鈔。後世物語聞書。一念多念分別求。安
 心決定鈔。(四十種九百六十八頁)

近時世上に自覺といへる問題が盛になりて來た、こはたしかに思想界の一轉機である。從來宗教上の思想か兎角宇宙問題の方から考へられた、汎神教であるとか、一神教であるとか、宇宙が即ち神であるとか佛であるとか、又人格的の神とか佛とか云ふ問題であつた。然るに全體宇宙といへる問題より宗教を考ふるときは兎角理窟に陥り安い、トルストイの如きは宇宙成立の問題の如きは宗教に何等の關係もないとまで断言して居る、宗教は決して宇宙世界の説明ではない、人生問題の解決である、而して其解決が即ち自覺といふことである。故に近時自覺といへる問題が盛になつたのは宗教が宇宙問題より轉じて人生問題の方に移りたのである、確かに思想界の一轉機である。

然るに兎角此頃唱ふる自覺なる現象が動もすれば頗る不健全の状態であるかの如き嫌がある、夫が爲めに世人が所謂自

自覺の問題

求道

第參卷
第四號

覺なる問題、夫自身までを重視せざる處がある。抑々人間が生來無明煩惱の爲に惑はされて既に業に迷ひつゝあるのである、而して自覺といふは此無明の闇を脱して光明の境界に目を覺ましたる有様で、宗教の中心問題は此自覺より外はない。佛教の如きは此中心問題より起りたので、釋尊の出家は此人生問題を解決すべく起つたのである、生死問題は即人生問題で、其解決されたる結果か即ち佛陀である。佛陀は覺者即自覺者である、當に自覺するのみならず、他を覺せしめ、覺行圓滿の人である。

從來汎神教、一神教など云ひたるときは佛教中の他力宗の如きは一神教として基督教と同一たるかの如く考へつゝある人がある。然るに佛教では單に普汎なる若くは人格ある實在があるといふ冷かなる問題ではない、人間は此自覺といふことが出来る、又自覺して吾人を悲憫したまふ絶対の大覺者が在すといふことである。而して此自覺によりて生死を解脱して永久平靜なる大人生即ち涅槃の境を實現するといふ問題である。故に近頃の思想界の傾向は佛教的といふも決して過言ではない、彼トルストイの如きも此邊に於ては言語は皆基督教の教義なるも其思想は基督教といふよりも寧ろ佛教的たるこ



次日卷下 次日卷中

(部の文和) (部の文漢)

最殊妙。入出二門偈頌。十住毘婆沙論卷第五具行品第九。後出阿彌陀佛偈。十二願。無量壽經優婆塞持戒會頌生偈。往生論註。略論安樂淨土義。觀阿彌陀佛偈。安樂集。立誓分。序分。定善義。散善義。法華證。觀念法門。往生禮讚。般若讚。往生要集。選擇本願念佛集。教行信證六要妙會本。(二十一種七百二十二頁)

住相運而還相運而文類。述國和讃。帖外九首和讃。親鸞八十八願御筆。本願寺聖人親鸞傳繪。親鸞講式文。頌德文。與御書。一牧起請。御俗性御文。夏御文。領解文(改傳文)。帖外御文。山科遺書(附錄目次)遺如上人御法語。三心三信同一之專。辨法各體妙。實教。總釋記。真宗大綱御消息。真宗信心妙。真宗持尊妙。往生明文妙。親鸞聖人血脈文集。真宗至道妙。真宗用意。女人教化集。一念發起妙。願具分別妙。聖道淨土名目。真宗要義抄。一心歸四妙。淨土法門見聞抄。真宗教化集。願川法語。念佛要妙。安心決得妙。女人要集。安心所集。持要抄。還正集。親鸞聖人御遺秘傳集。真宗抄。自力他力專。彼岸記。無常觀記。光明名號因緣。自要集。聖德太子奉讚。覺如上人歌白文。一宗得意之專。願淨土真宗抄。真宗正意集。袖中抄。一念成就開會。開信抄。持德抄。安心定得抄。聖各上人十卷傳。(五十九種七百餘頁)

本書收むる處、親鸞上人、蓮如上人、及び歴代全集、は概ね網羅したるもの、優美と堅装、印刷亦た美明にして、原本の丁數を存附して學者純他力の教義、信仰門及び精神修養の根本は幾多涌出する處皆な源を茲に發す、若し其れ本書一本を勝軍凱旋の吉年を迎へて、此の期に遅れず速に非常の割引を以て發賣近世無比の廉價購得せられんことを敢て江湖の諸彦に薦む。

東京市麻布區飯倉町五丁目
東京市本郷區春木町二丁目

森江 森江 分本店

電話新橋二九七二



とは確かである。

此に於てや今後の問題は吾人は如何にして自覚するかといふことである。世人は少しく光明を認めるとき直に我は自覚せりと絶叫するのである、而るに眞の自覚の境なるもの即ち佛陀の境なる者は中々世人が想像するが如き低き者でない、一旦自覚せりと思ひたるは眞に自覚したのではない、眞の大覺の境は仰げば彌々高く、鑽れば彌々堅きものである。かく佛陀と吾人と千萬里隔るにつきて、如何にして吾人は其佛陀に接觸すべきやと云ふ問題となる、古來佛敎に觀法と稱する實行は即ち吾人と佛陀と冥合する方法である、所謂心佛及衆生是三無差別である。かくなれば時として目に佛を見るべく耳に佛を聞くを得べきことである、されど此の如きは單に佛陀を信するに至る一經過たるに過ぎずして、如何に佛と接觸するも一時に止りて又何人も必ず經驗するといふことは出来ぬ、此の如きは未だ眞の自覺ではない、眞の自覺とは即ち自己が罪の子たることを自覺して、而して此の如き罪の子を救ひたまふ慈悲の親がましますことを自覺することである、是何時でも、何人も自覺し得べきことである、否必ず自覺せざるべからざることである、即ち是か健在なる自覺即ち信仰である。

罪の自覺

世に罪の自覺のなきほど悲むべきことはない、人間にして我は罪なしと公言し得るもの果して幾人かある、若し罪なしと公言する人ならば最も憐むべきの極である、何んとなればこは罪がないのではない、罪ありながら其罪に氣が附かない人である、即ち罪の自覺のなき人である。

破廉耻罪を以て監獄に入れるの人は實に憐むべきの極である、彼が監獄に入れられて自由を失ひつゝあるは實に惘然の極である、其罪の爲に社會より疎外せらるゝも不便である、されど最も憐むべきは自分の罪あることを氣附かずして、是が普通であると考へて居る心が實に涙の種である。

凡そ生きたし生けるもの誰が罪なきものがあるらう、親鸞聖人が一切の群生海、無始より以來乃至今日今時に至るまで汚穢不善にして清淨の心なく虚假蹈偽にして眞實の心なし、と斷言せられたるは千古動かさる鐵案である。何人も此宣告に對して抗議し得るものは一人もない、而して此宣告を受けて中心頭の下るものは少きのである、佛の眼より見たまひたるならば彼の監獄の人と一般である。

忽然として念起る、名けて無明とす、吾人は往昔一たび迷ひ始めしよりして無明海に沈淪しつゝ、しかも之を覺らぬのである、大覺佛陀の眼には如何に映じつらん、大慈大悲の御心は唯矜哀の念を以て滿たされたまふ次第である、哀愍の情禁するあたはず、初めて吾人の上に下されし力が即ち本願である。『無明の大夜をあらはれみて、法身の光輪はもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する』實に大覺佛陀は吾人罪惡の無明を醒ますべく現はれたまひし光明である。

無明中に居りながら無明に氣附かざるものは救濟の光明を仰ぐ必要を認めない、否々自分で光明を發揮出来るつもりである。自分に光明があると考ふるゆゑに佛陀の光明を仰ぐ心が起らぬ、人間が佛陀の方によらず、佛陀の光を仰がずして自から光明を發揮し、また發揮し得ると考へつゝある間は如何に頭上を照したまふ光明も氣附かぬのである。監獄に入りても自分の罪に氣附かぬ間はまた親の慈悲に氣附かぬのである、憍慢と蔽と懈怠のものは、以て此法を信すること難し、救濟の門戸を過ぐるときは高慢の頭を下げねば通らぬ。

自分の力で自覺するのであると考へつゝある間は佛陀の力を認むることは出来ぬ、自分の力で自覺すると云ふは即ち自

救の自覺

分が佛陀の如く自覺すると考へつゝあるのである、これが聖道門である、所謂大聖の道である、聖者の足跡である。然るに現時大聖を去ること遙遠にして其足跡を追ひ難く、且つ其理深くして吾人の智解微かなるを以て、とても其道の通り難きを經驗するに及びて、吾人の微弱なる、罪惡あることを自覺するに至るのである。此に於てや佛陀の大慈悲力、大智恵力、大誓願力、光明攝取衆生力は仰がずに居られぬやうになる和讃に曰く『聖道權假の方便に、衆生ひさしくとまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ、』と。

我々が眞實罪あることを自覺することが出来たときは既に此の如き罪あるものを憐みたまふ佛陀の御親の在すこと、分かつて来たときである、佛の御慈悲が初めて身に泌み渡つたときである、即ち如來の御救を自覺さして下さつたときである。嗚呼無始已來如何に佛陀の御恵みを蒙ることの深き、實に佛陀は此の如き我等が罪を救ふべく現はれたまひたのである、若し此佛陀の矜哀ましますば我々は如何て自己の罪を覺るべき、實に佛陀の慈悲は我々を覺らしむべく飽くまでも

我等に附き添ひたまひたのである、實に我等を戒むること、嚴父の如く、我等を憐むこと、慈母の如くである。其父母の念力が吾人に徹到したときが即ち吾人が父母の慈悲を認めたとときである、其父母の慈悲を認めたとときに吾人は如何に佛の慈悲に背きて罪を作りてあるかに氣が附きた次第である。

世に父母の慈悲なかりせば人世は暗黒である、墮落せる子供が悔ひ改むる心の起りたるは親の恵みの深きことを覺つたときである。人間何人も此の如くである、此の如き苦惱の有情を憐みたまふ佛の御慈悲の在ますことが氣が附きたとき、今まで此の如き不思議の佛智を疑ひてありしことを深く悔ひ責むる心が起るのである、嗚呼世に佛陀ましますはずは暗黒より暗黒に陥るのみにして如何にして光明の世界に出ることが出来よう。

世の放蕩息子が徒らに親の慈悲に甘へて父の戒をも馬耳東風に聞き流し、母の愛をも當然の事と考へてさのみ感謝の心の起らぬ如く、我等も佛陀はありがたしと口には言へど心には深く驚きをたてざるのみならず、却て平氣に罪を行ひつゝ、是か凡夫の常であると思ふるが如き病弊に陥ることがある。こは決して眞實の慈悲を感じたものではない、眞實親の

長者窮子の自覺

經に譬喩を説きて曰く。人ありて年幼稚にして父を捨て、逃れ避きて久しく、他國に住すること、或は十年、二十年、五十歳に至る。年既に長して益々困窮を加へ、四方に馳騁して衣食を求め、漸々遊行して過々木國に向ふ。其父先づ來りて子を求むれども得ず、中途にして一城に止る、其城内に富み、財寶無量多くの儀あり。時に貧窮の子、諸の聚落に遊び、國邑を經歴して其父の止る所の城に到る。父毎に子を念ひ、子と離別してより五十餘年、未だ嘗て人に向て此の如きの事を説かず、但自ら思惟して、心に悔恨を懷く。自ら念ふ、我老朽にして多く財物あり、而して子思ふることなし、一旦身没すれば財物散失して委付する所なし、是を以て懇懇毎に其子を憶ふ。其時窮子感服して父の舎に到り、住して門側立ち、遂に其父の莊嚴華麗なるを見て、即ち恐怖を懷き、竊かに是念を作さく、是或は王ならむ、我等の近く所に非すと、疾走して去る。富める長者は我子の忽然として來れるを喜び、使者を遣はして捉へしむ、窮子驚愕して怨を釋し大に喚ぶ、使者強て牽き還らむとす、窮子自ら念すらく、我罪なくして囚はれむとすと悶絶地す。父遙かに見て之を止め、冷水を以て子の面に灑ぎて醒悟せしめ、其意に隨て趨かしむ、窮子喜びて貧里に至りて衣食を求む。爾時長者其窮子を誘引せむと欲して、方便を設け密かに二人の憔悴して感徳なき者を使はし、誘ひて供に蕪を除かしむ。他日父密窟の中より遙かに子か獲へたるを見、即ち瓔珞を説して、垢膩の衣を脱ぎて其子に近き、物を與へ人を使はしめ、且告て曰く。我年老大にして汝は小壯なり、自今已後生む所の子の如くせむと、即時に長者更に字を作り、之を名けて兒と爲す。爾時窮子、此遇を次ふと雖、猶自ら客と謂ひ、賤人と作す、是故に二十年中常に蕪を除かしむ。是を過ぎて後、心相體信、入世離世、爾時長者疾あり、自ら將に死せむとして久しからざるを知り、窮子に語りて曰く。我今多く金銀財寶あり、汝悉く之を司れと、窮子敬を受けて物に領するも下劣の心未だ能く捨つべからず。父命終らむとする時に臨み、其子に命じて親族、國王、大臣、刹利、居士を會し、即自ら宣言して言く、諸君當に知るべし、此は是我子なり、我の生む所なり、某城中に於て我を捨てて去る、玲瓏辛苦すること九十餘年、其本の字は某、我名は某甲、此は實に我子也。我は實に其父也、我有する所の一切の財物皆是れ子が有なりと。是時窮子父の言を聞き、即大歡喜して、未曾有を得。而して是念を作さく、我本、心に希求する所あることなし、今此寶財自然にして至ると、此大富長者は則是如來なり、我等は皆佛子に似たり、如來常に我等を説て子となし玉へりと。嗚呼是深遠なる實験にあらずや、人生に於て此の如き慈悲慈愍なる如來の父を認るの謂にあらずや。

慈悲を感じたるときは今まで分からざりし父の警戒もし、みづと難有く、母の慈愛か一言一句勿體なく頂けて、如何にも我身の久しく父母を蔑にしたることを懺悔せねばならぬ如く、此の如き慈悲の佛陀の在すことをば蔑にして無始已來其恩徳に背きし罪を懺悔せねばならぬ。

釋尊は娑婆往來八千度、常に罪惡の吾人を戒めたまひし嚴父である。彌陀佛は五劫の思惟、永劫の修行、吾人のために身を苦毒中に終るも悔むたまはざる悲母である。吾人は此の如き父母の矜哀をなきものにしたる長者の窮子である、實に釋尊は現世に肉身を以て佛陀を示したまひて、彌陀の救を授けたまふ方である、彌陀は盡十方無碍の光明を放ちて如何なる罪惡の者も悉く攝取せんと手を擡げたまふ方である、此二尊の父母によりて吾人初めて一點明信佛智の信心を起したまひたるのである、恰も放蕩の息子、父母の段々の慈悲によりて胸中一點良心の芽ざしたるが如きものである和讃に曰く、『釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり』

感謝

落花無常

庭前の櫻花滿開雪の如し、翌朝佛前に詣づ、落花紛々として室に入り、衣を撲つ、忽にして想起すらく、明日ありと思ふ心の仇櫻

夜半の嵐のふかぬものは、聖人が無常迅速の世相を觀したまひて、出家求道の志一夕を緩ふすべからざるの有様、切實一點の餘裕を許さず、此の如くにして春秋二十年遂に吉水の禪房に凡夫直入の眞心を決定して、長へに涅槃常樂の城を開きたまふ。

嗚呼無常迅速は千古眼前の事實也、而して此事實の存する限りは聖人が味ひたまひし涅槃都城の信門は吾人の上に開かれつゝあるなり、聖人の遺歌に曰く

我なくと法はつさまじ和歌の浦
青草人のあらむかぎりは
年々歳々花開き花落つるかぎりは亦如來常樂の靈光は長へ

に限なかるべし。

庭前の雑草

一夕質樸なる田舎びたる人來りて曰く、我は越中の者井澤清次郎とつふ、國にありて平素『求道』を拜讀して如來の御恩を蒙れるもの、冀くば終身役使して法の爲に盡し奉らむことを、乃ち遙に上京し來ると、予深く其志に感じて家情を問ふ、曰く親あり、妻あり、子あり、且つ自ら養ふの資あり、冀くば身を以て佛に事らむと、予曰く、御身の志深く感ずる所なるも寧ろ一家團樂佛恩を喜びたまはば田を作り親に事ふること皆是佛恩報謝の務ならざるはなし、彼翌朝來りて佛前に詣す、予乃ち歎異鈔を贈る、彼喜びて且つ曰く私が如き愚鈍の者分かり易く一言の教化を賜へと、予曰く唯何事もなく佛様の御慈悲を喜び奉るばかりなりと、曰く先生の言は即ち佛の仰なり、我の東京に來る此他に何の求むる所なし、冀くは一日たりとも身を役することを得むと、遂に終日庭前の雑草を抜き去りて一莖をも残す所なし、予猶徐に彼か爲に計らむと欲せり、越へて三日越中より葉書來る、謹て教を受く、御恩賜の歎異鈔は繙讀以て終身の寶とせんと、嗚呼二百里の山河

遠く來りて庭前の雑草を抜き去る、嗚呼佛天は此の如きの人を遣はして吾人胸中の雑草を抜き去りたまふ、吾人猶彼に對して心残りの存するは却て是吾人に對して佛陀御催促の常に存する所以にあらずや。

四海兄弟

朋遠方より來る亦樂しからずや、嗚呼吾人の朋は全國に滿り、同じく如來の御親を共にせる同朋也、同じく念佛の道を迎れる同行也、一たび如來の御恩を仰がば少年も兄弟也、老翁も兄弟也、知るも、知らざるも、兄弟也、學あるも學なきも、都人も田舎人も兄弟也、而して此の如き同朋同行或は學びの爲に來り、或は聽講の爲に來り、或は報謝の爲に來る、若し如來の御心を賜ふにあらずんば人何ぞ能く一見舊知の如く心を同じくすることを得む、御一代聞書に曰く、

蓮如上人順誓に對し仰られ候、法敬と我とは兄弟よと仰られ候、法敬申され候、是は冥加もなき御事と申され候、蓮如上人仰られ候、信をえつれば、さきに生る者は兄、後に生る者は弟よ、法敬とは兄弟よと仰られ候、佛恩を一同にうれば信心一致のうへは四海みな兄弟といへり。

人道、佛道

世の人常に曰く、人間の道さへつとまらぬもの、いかてか佛を信ずべきと、一往其理あるが如しと雖、未だ宗教の眞意を知らざるの言也、抑々吾人は果して能く人道を行ふことを得べきや否や、我能く人道を行ふと考ふる人は未だ眞の人道を知らざるの人也、吾人佛の御慈みによりて初めて父母孝養すら爲す能はざる凡夫たりしことを知る、唯出來得べき限りを盡して、報恩の行をつとめむかな、此に於てや僅かに人間らしき行を爲すに至る、故に曰く信仰ありて初めて人道を行ふべし、吾人罪惡の徒、佛陀を信ぜずして何ぞ能く人道の一端をも行ふことを得んや。

親慈聖人は孝養父母、奉事師長、慈心不殺等の三福を以て定散自力の善なりと宣ふ、我父母に孝養を爲しつゝあり、人道を盡しつゝありと思ふものは心すべし哉、是眞に父母の恩を知らず、慈悲の何物たるかを知らざるの時也、吾人佛陀を認めたるの時初めて父母の恩を知りたるの時也、慈悲の味を知りたるの時也、此に於て自己の不孝を懺悔して自ら孝養來り、人間の冷酷を自覺して知らず識らず人道來る。

嗚呼信仰なき人道は危き哉。

眞正の慈愛

父母の子を愛するや、眞箇に佛陀の吾人に對せらるゝの眞情なり、しかも若し信仰なき慈愛は最愛の子を禍するもの也、子にして富を欲すれば之と與へ、學ばんと欲すれば之を學ばしめ、業を興さんと欲すれば其資を興ふ、而して遂に之に信仰を興へずんば恰も其備を爲さずして孤身虎狼の巷に入らしむるが如く、若くは銳刀を興へて其用法を教へざるが如し、人を賊ひ、已を害ふこと昭々乎として明らか也、司馬溫公の家訓に曰く、書を遺すも子孫之を讀まず、財を遺すも子孫之を散ず、如かず陰徳を冥々の間に積んで子孫長久の計を爲さんにはと、而して陰徳とは何ぞや、財を散ずるの謂か、人を教ゆるの謂か、如かず佛陀の大慈悲を渴仰して以て子孫不文の法則とせんには、嗚呼佛名は是れ父母が其子孫に傳ふべき唯一の財産也、寶典也、家訓也、蓮如上人の遺言に曰く、

かたみには六字の御名をとめめく
 なからん後は誰も用るよ
 嗚呼何れの家も用ゐざるべからざる遺物也、宜哉希有の信仰に入るの人は佛祖既に佛縁の家なること。
 嗚呼信仰なきの慈愛は恩愛也、愛欲也、愛情也、而して佛陀の慈愛を傳ふるこそ正に是れ父母眞正の慈愛なれ。

講話

大覺

(求道學金日囉講話)

近角常觀

從來宗教を説く上にしまして、久しい間言はゞ理屈の方より進まうとする傾向がありまして、或は佛陀とは如何の人であるとか、又は我々の信すべきは何であるとか、斯様の考が久しい間行はれて居りました。即ち一口に言つて仕舞へば汎神教であるか、一神教であるかといふやうな具合で、宇宙全體が神である、佛であるとか、或は我々は神又は佛陀を信ぜねばならぬのであるとか、斯う謂ふ風に理屈を以て信仰の問題に向つて居つたのであります。即ち信仰上の問題が何の方面に向つて居つたかと言ふと、宇宙の實在がどうであるとか、信すべき人格の存在がどうであるとか、凡て斯う謂ふ風の道行が長い間行はれて居つたのである。而して此等の考の行はれた間は實は世間に於て佛陀の味は解かり難かつたのであります。要するに、宇宙即ち神である、佛であるとか、人格ある佛又は神が有る可き筈であるとか、此の類の考から信仰に向ふのが今迄の一般の傾向であつたのです。此考から進むだゆゑ佛も神も同じであると考へる、又哲學上の本體と言ふ事をも此等と同一に見るやうに成つたのであります。併

し此の間に於ては、佛陀の味は解から無かつた、佛陀が有ると言つて居つても眞の味は遂に解から無かつたのであります。

處が近頃の思想界の傾向になると、そんな問題では無い。何うかと言へば、今實際人生に生活する上に於てどうも自分の足許が確かで無い、考へて見れば今迄當然と思つて居つた事が凡て不安であると、斯の如く事々物々に就いて不安を感じて來て、到底安心がならぬ。其處でこれでは可かぬ、是非に心を確かに仕度いと謂ふやうに極めて直接の問題に成つて來たのである。亦世間の上に就いては、何うも人生には苦が多い、何うかして早く此の苦を脱がれ度い、心に平和を得度いといふ風になりて、最早や今迄如き餘裕のある問題では無い。自分が今暗黒である、自分が今苦痛である、何の方法でも好いから一刻も早く此の苦を脱して安心を得ねばならぬといふ事に成つた。即ち信仰を求むる、宗教を求むるといふ前に、先づ自分が不安に堪へぬ、何うかして安心を得度いといふ傾向が近時に及んで俄に思想界に顯はれたのであります。而して此の結果として一般に信仰追求の念が盛んに動いて來て夫よりして或は安心を得たとか、光明を見たとか、安慰に接したとか、此等の種々の問題も起つて來る事に成つたのである。そうして其極が即ち人間は自覺をせねばならぬ、又する事が出來るといふ所謂自覺の問題に成つて、中には自分は今古聖賢の得た如き自覺を得た、亦人は古聖賢の如く自覺する事が出來ると言つた人も有つた次第です。之を要するに現時の思想界の問題の根本は自己内心の暗黒苦痛より目醒め

自覺して絶對安心の境に行き度いといふ點に在るのであります。併して斯く問題が自覺であると成つて來ると茲に佛陀の意義が初めて解かる機運に到つたのであります。

抑も佛陀とは何うかと言ふに即ち佛は覺者である。覺者と謂ふは諸君が今現に求めて居られる明らみを見出した境が即ち覺である。して見ると問題の出立點は極めて明らかで、宗教としては茲が最も肝要の點であります。宇宙の本體が何うであるとか、或は絶對の人格の有る無し杯の穿察研究が決して宗教では無い。自覺を得て自己内心に光明を見出し一切煩惱を解脱するいふ此の點が宗教の問題の根本であり、茲に到つて佛陀の意義が初めて解る事に成るのであります。

夫て佛陀と言ふは今言ふ如く覺者である。之は早く言つて見れば大聖釋尊出世の歴史を見ても直ぐ解るのであります。大聖釋尊が拾九歳の御時に出家をなされ卅五にして成道をなし菩提樹下に於て悟りに入られた。初めは或は婆羅門の禪定苦行に安心を求められた、けれども如何にしても安心が得られぬ、最後に菩提樹下に於て諸の惡魔を斥け一切の苦を斷ちて大安慰を得られたが釋尊の成道であります。此の世に於ての佛陀が知り度ければ、大聖釋尊の一生の歴史は最も大なる自覺の歴史である、本日即四月八日は此大覺世尊の降誕の聖日でありますが、今日道を求むる上より言へば大聖釋尊の通られた道筋は此の上なき理想的求道の標本であります。家を捨て妻子を捨て一切を捨て、何うしても心中平安を得無い、終に最後に及んで八萬四千の煩惱が一時に顯はれて來て、遂に之に打勝つて解脱涅槃に入り降魔成道を爲された。此の

味は實に宗教の本義、苦を去つて解脱平和の境に行くといふより言へば誠に理想の極であります。釋尊の活きたる事實は今日思想界の活きたる標本であります。

て佛陀の意義は解つた。即ち大聖釋尊が心中苦悶に耐え無いて解脱涅槃を求められた其道行が即ち佛陀の歴史でありまして、而して此の佛陀の道行が又現時諸君が法を求めて進んで御出になる道行である。夫れて此の點から言つて見れば、若し入眞の安心を得解脱涅槃の境に行ける事が出來るならば、凡ての人間が皆釋尊と同じに成れるべき筈なのである。又釋尊も同じに成れるとれ説きなされてあるのです。て若し我々釋尊の如く行ひ釋尊の如く進めるならば我々大聖世尊の如く成られぬといふ譯では無い。近頃或る人々が古聖賢と同じ如くに言はれるのも亦此の邊にあるのでせう。併しながら佛陀は斯の如くあるが、我々の心中は何うであるか。佛陀は斯くの如く絶對最高の理想である事は知つて居るが、併して我々は釋尊の如く行ひ釋尊の如く内心の光明を發揮する事が出來るかどううか。といふに我々にはとても夫が出來ぬのである。夫て實際になると成程佛陀は廣大の境である、我々も能ふ可くば其處に到る事を希ふのであるが、佛陀の境は之を仰げば仰ぐ程彌々高く遠く奥深かい。之を考へ之を味へば智行何れの方面にしても増々大きい事を發見する。而して我々が其佛陀に近づくといふよりも、却て仰げば仰ぐ程彌々其距離の遠い事を感ずる計りなのであります。

此の佛陀境界の廣大なる味に就いては、大乘の諸經典到處に皆夫が顯はれて居るのであります。今日は一つ初めより

れ話し致す考なのであるが、全體佛敎の經典を讀むに、佛陀無しに讀んで居ては到底解かりやうが無い、佛陀を仰ぎ味はふの心なしに唯宇宙の研究とか何とか云ふ考で讀んで居るのでは、いつ迄立つても解る時は無いのであります。例へば「大乘起信論」を讀むにしても、本來は文字の如く信を起さしめる爲めに書いた「起信論」である。全體「起信論」の敎ふる處は何うかと言ふに、大聖釋尊が此世に出現せしめて始めて佛陀が出来たのでは無い。既に久遠の昔より本覺の境と謂つてとこしなへに變らぬ覺の境がある。而して忽然として此の本覺の上に無明が起つて、其の爲めに我々は迷ひ苦しんで居るのであるが、夫を切り拂ひ佛陀の境に至られた、始境の境が即ち大聖釋尊成道の有様である。であるから我々も此の覺の境に行けと勸めるのが「起信論」の本意なのであります。然るに今迄は之を理窟で讀んで居たものだから解らぬ、却て信仰を毀はす事になつたのである。成程大聖釋尊を見ると如何にも偉大なる境界の存する事が解る。爲に斯く信を起す事になるのであります。

偕て話が前に戻りまして、其の偉大なる境を書いたものが大乘の諸經典である。夫であるから一歩々々佛陀を仰ぐ問題として讀む時は何の經でも佛陀の廣大な味ひ覺者の偉大なる境が解かるのであります。一々例を取つて申すにも及ばぬ、彼の華嚴經は何うであるか。大聖釋尊が菩提樹下で大覺にね入りなされた時に、釋尊自ら思召すには、斯の如き廣大の境界は之を如何せばよいのであらうか。世間の群衆は皆此の味を知らずに居る。併しながら之を知らさうと思つても、あま

り廣大に過ぎて、とても彼等をして領解せしむる事が出来ぬ。恰も盲者に明を見よといふと同じである。偕て如何にせば善きかと、御自身の悟の味ひをば一七日二七日三七日五七日遂に七七日の間菩提樹下で彼方此方と處を移して考へなされた。此の事は小乗の經典にも書いてあるのです。偕て佛陀は斯の如く思惟なされて如何にして之を説く可きかを考へなされた。或は衆生の機類を御覽あらせらるゝに種々がある、例へば蓮華の水上に延びて咲くものもあれば、水面に浮びて開くもあり又は水中に沈めるもある如く、衆生の機類にも上中下無量の別がある。之等に對して如何にして解く可きやを考へなされたとあります。此の時の其の偉大なる境界を廣げられたが即ち華嚴の説法であります。故に華嚴經を拜讀すると如何にも廣大に限りが無い。さながら綱を張り渡した如く其上に大きい佛其上に大きい佛と有りとならゆる佛陀の境界が書かれてある、心の廣ろくとして如何にも限りの無い境界が華嚴經のてあります。

次に此の華嚴經は釋尊最初の説法であるが、然らば一番最後の涅槃經は何うあるかと言ふに、涅槃經は佛陀が彌々大涅槃に入らなされる時の説法である。釋尊が弟子達に仰せられるには、我は死して吾が肉体は滅して仕舞ふが、去りながら汝等佛弟子救げく事勿れ、肉体は無くなつても「如來は常住にして變易ある事無し」法身は常住不變て永久に滅する事は無いと、夫よりして大涅槃といふは決して一切が無くなるといふ消極的のものでは無くて、廣ろくとして極まりなき味ひである事を説きなされたが涅槃經であります。

既に斯の如く釋尊の御經を、初め華嚴經より最後涅槃經迄、何れの御經を味うても、佛陀の境は如何にも大きい境である。て茲に諸君に一言して置き度いのは、佛とは此のひろくとして極まり無き御悟りが佛であつて、決して我々がとやかくと此方でござぬ、べき者では無い。佛陀の境は之を仰げは仰ぐ程彌々高く大きくなつて我々は彌々低く小さくなる。故に我々が初めて釋尊の傳記を讀んで、我々も亦釋尊の如く成ることが出来ると思ふのは極めて瞬間の中で、佛陀の境は中々そんなに手易くは無。仰げば仰ぐ程、求むれば求むる程増々高く大きくなり我々は其反對に増々小さくなる。佛陀と我々との距離實に千萬里、佛は絶對清淨の佛陀にして我々は極く淺間しき汚れの我々である。して見ると佛は我々が安心問題の燈明臺であり、先達ではあるが、行けば行く程遠くなり、近よれば近よる程距離が隔つて来る。之に於てか我々は如何にせば佛に近寄り佛に成る事が出来るか。佛陀の境が解れば解る程彌々近付き難いのが、如何にせば佛陀に行き事が出来るかと云ふことなるのであります。

其處で佛陀の境界の大きい事は解かつたが、どれだけ境が大きくても其佛陀が我々の上に頂け無くては駄目である。此に於て吾々が佛と融合する事の爲めに觀法が來たのであります。此は如何にも最の事、一方には觀法一方には修行が現はれた。觀法と云ふは、其の偉大なる佛陀の境をば我々が方寸の心の上に味はせて貰ふ事でありませぬ。或は其の佛の境をば大海の如くに觀じて、我々の小と佛境の大と一致せんとするが華嚴の海印三昧である。斯の如く諸種の觀法が顯はれて之に

よつて佛陀の境に近付かうとするのみならず、又一方では日々夜々の修行の力で距離千萬里なる佛陀の境に歩みつかうとする修行が起つて來たのである。まあかくの如くに味はつて來ると佛陀の廣大なる事が彌々解かつて來るのであります。かくて一歩々々我々の迷を捨て偉大なる佛陀の境に進まんとするのが即ち佛道修行であります。

處で我々はかくして大聖釋尊の境に達する事が出来るかと云ふに前にも言ふ如くとも出来ぬ。又今申した通り觀法と修行の方法はあるが、然らば之が實行出来るかと言ふに、我々は之を試る程彌々其の出来難きを發見して來るのみなのである。全体宗敎は昔も今も又此の後何時迄經ちても常に同一て進歩發達すべきでも無ければ退歩す可き者でも無い。我々の苦みが昔も今も同一であるだけ宗敎も又いつ迄も同じなのであります。けれども聽く者の方で教權的に無理押し付けに押し付けて聽いて居るのでは駄目である。佛敎には誰も知る如く聖道門と淨土門の二た道がある。此は皆んなが何氣無しに口にして居るのであるが、今申した如く、自ら勵みて釋尊の境に至らんとするのが即ち聖道門である、處が此の道が實際我々に出来れば誠に結構であるが、前々よりいふ如く到底行はれ無い、未だ一歩も進まぬ前から我が力盡き我が足疲れ彌々出来ない事を見出すのみである。道綽大師は自分が聖道門の成じ難い事を悲まれて「大聖を去ること遙遠なるに由る」解深く理微なるに由る」と仰せられた。又吾が親鸞聖人は何と仰せられたかと言ふに、和讃には

釋迦如來かくれまし／＼て、二千餘年になりたまふ、

正像の二時はをばりにき、如來の遺弟悲泣せよ。」とあります。大聖釋尊御入滅の後既に二千年、釋尊の法の如く行はう杯とは、今や我々は口にすらも言ふ事は出来ぬ。眞地目に考へ佛境の偉大を味へば味はふ程、解深く理微なるに由りて到底其の證し難さを發見するのみである。結局證してこそ佛陀と我と一致するのであるが、我々はとても證するとは出来ぬのであります。かく我々は、佛陀とは如何、安心とは如何、求道とは如何といふ等の問題は皆解かつたが、最後に及んで事實上我々はどうしても佛陀と成るには力及ばぬと言ふ問題に歸着して仕舞ふのであります。

此の點に達して初めて現はれて來たのが即ち淨土門他力の教であります。其處で此の他力の法門は何うしても茲に至る迄の道行を自己心中に味はつてからして無くちや眞の味は頂かれ無い。何も他力信仰を求むるに必ずしも茲迄の経路が必用であると申すては無いが、如來本願力の廣大の味はひはどうも茲に到つて初めて解るやうであります。如來のお救ひが難有いといふ事は大底の人が初め家庭に於て聞いて居るのであるけれども、此の時にはどうも解りにくい、解かりにくいのは未だ求道の苦悶にも出會はず覺者の偉大なる境を仰ぐ心も起ら無いで、未だ佛陀の慈悲が味へる道行きに成つて居無いからであります。鎌倉時代に到つて他力の法門が起つたのは遂に人力の及ばぬ事を自覺して起つたに違ひ無い、が此の力の及ばぬといふのは夫迄長々の間種々の經驗に出會つて來た結果であります。故に茲迄の道行きの味を感じて居無くては他力の味は解ら無いのであります。

間に合は無く成つて初めて現はれた本願である、して見れば彌陀の本願は宗教としての極意であります。

大聖釋尊が御出世の所以も實は此の廣大なる本願の慈悲を説かんが爲めてあります。釋尊が自ら成道して廣大なる佛境を體現して示したされたのは、何も我々に其の如く爲よとては無い、我々を導いて其の境に入らしめ度いが御本意なのであります。覺者出現の本意が、既に其處にありて見れば其本意たる一切衆生を其境に入れしめんとするのが彌陀の本願であります。絶對の境にある佛陀が、諸君と私共をして、迷より離れしめ度い、無明の酒、三毒の酔より醒まし度いといふ大悲念力から久しい間御修行下された、そうして今日只今迄この慈悲の願力で我々を導いて下さるゝが本願である。距離千萬里の御境より此の極めて幽かなる、極めてさゝやかなる私共の上に、救済の綱、救済の手を垂れさせ給ひたるが本願であります。茲に於て全く佛陀の御救ひである事が頂けるのであります。

然るに一時の思想界の有様は前申すが如くて、宇宙に絶對の人格が有るとか無いとか云ふ問題であつたゆへに、同一の筆法で五劫思惟兆載永劫の佛陀が存在するや否やと云ふが如き冷やかな問題となつた、故に佛も神も同様に考へらるゝに至つたのである、故に今お話する佛陀の佛陀たる點は何うも味ひ方が分らかつたのであります。處が今日では思想界の傾向が全く一變して來た。最早や昔の餘裕ある問題で無い、吾人は如何にせば自覺する事が出来るかといふ問題即ち如何にせば佛になれるかと云ふ問題に進んで居るのであります。斯う成つ

更に進みて佛陀か此世へ出現なされたは何の爲めかと言ふに、唯佛陀の境は斯うであると言ふを人に示す爲めに出現なされたのでは無い。迷へる我々をして此の境に入らしむる爲めに御出なされたのであり、此の境に入らしむる爲めの佛法であります。即ち佛陀の境には到底及びも付かぬ我々をして何うにもして之を導き之を知らしめ廣大なる同一味の境に引き入れて下さるが佛陀の佛陀たる處であります。既に佛陀が一切無明を取り拂つて始覺の佛陀と現はれたまふ如く多くの無明の人を如何して其の境に行かしめうるかと佛陀最後の問題なのであります。けれども眞實に修行をしたる佛法を行ふ杯とても凡ての人間は出来無い、現に諸君と私とが出来無いのである。茲で阿彌陀佛の本願力が現はれて下さるのであります。阿彌陀佛の本願力とは何うか、其の廣大の境より廣大の心を以て我々迷の人間を御覽なされ、如何にもして此境に引き入れ度い、此の境に導き度いといふ大慈大悲の念力願力の確りが即ち阿彌陀佛の本願であります。

倍て茲に到つて初めて佛の救済佛の慈悲の難有い事が解つて下さるのであります。全体佛陀の境など現今に於てはかく話致す必用も有るのであるが、親鸞聖人法然上人が他力門をお開きなされた時分ては殆ど常識であたりまへの事であつたのである。其處で聖人が天台宗で其佛陀に達せん爲めに實地觀法修行して無益であると自覺なされた、然らば如何にして自覺すべきかとの問題に達した時に初めて現はれたのが彌陀の本願で、即ち極點迄力極はまつた最後ア、斯るが故に彌陀の本願が難有いとお頂きなされたのであります。修行や觀法が遂に

て來ると我々は自分で自覺するか、或は佛陀の御力に導かれ、其の境に至るか、二つに一の道しか無い。聖道門であるか淨土門であるかといふ昔からの古い問題が今日では重大なる新問題であるのです。何が何でも我々は今が苦しい、今が不平である。何うにもして我々は一時も早く覺者の位置に行かなくてはならぬ。扱て自分で行かれるかと言ふにとても行かれぬ。斯うなつて初めて彌陀佛の本願がア、有り難いと頂かれて來るのであります。して見れば本願の力は實に佛教の眞髓である。抑も又大聖釋尊御出現の御本意なのであります。親鸞聖人は釋尊の御出現を如何にお頂きなされたかと言ふに

如來世に興出したまふ所以は、唯彌陀の本願海を説かんとなり。五濁惡時の群生海、如來如實のみことを信すべし。

《正信念佛偈》

とあります。私は初めの間は何うも此の味が解ら無い、如何にも我田引水の言ひ方をせられたものだと思つて居ました。何故なれば外にも澤山釋尊の御宗旨があるて無いかと思ふたからである。自分は眞宗であるなど、眞宗を佛教の一派として見て居るからして斯の如き誤解も生じたのであります。親鸞聖人のお意では、佛陀の衆生を救ひ給ふ本意の根本を説かれたものが彌陀の本願である。此の本願の綱を握れば佛陀は何人と雖悉く引き上げて下さる。此の綱を握れば佛陀は何れに大聖釋尊は此の土に出興して下されたのだ、と斯う信じ御出になつたのであります。

御覽なされ苦より助け度い、迷ひより脱がさせ度いとの大慈悲が手となり綱となりて我々の上に顯はれたが彌陀の本願であります。「唯信鈔」には次の如くに言つてある。

例へば人ありて高き岸の下にありて登る事能はざらんは、力強き人、岸にありて綱を下して、此綱に取りつかせて岸の上に引き上さんと云はんは、人の力を疑ひて綱の弱からんを危ぶみて手を收めて之を取らず、更に岸の上に登る事を得べからず、(乃至)佛力を疑ひ願力を頼まざる人は菩提の岸に上る事難し、唯信心の手を延べて誓願の綱を取る可し、佛力無窮なり、罪障深重を重しとせず、佛智無邊なり、散亂放逸の者をも捨る事無し、唯信心を要とす、其外をば願みざるなり云々

又同じく「唯信鈔」の文に「彌陀如何ばかりの力ましますと知りてか罪業の身なれば救はれ難しと思ふべき」と仰せられてある。人が自分は斯の如く罪が深いから助からぬとか、又到底自分は仕方が無い者だ杯と、自ら手を空しくして居るのは、現に目の前にある本願の綱を認かまらず疑つて居るのである。「彌陀如何計りの力ましますと知りてか救はれ難しと云ふぞ。」一體佛陀は何れ程の力があるか知て居るのか。自分の罪が深いから本願の綱が切れまいかなど、思ふは未だ本願の強力を知らず疑つて居るのぢや。願力本願と言ふも、之を平たく申せば、何うしてもして助け度いとなる佛の慈悲心、慈悲の御力で、其外に何もありません。願力と言へば何か特別に蒙る物のある如くに思ひ易い。親の慈悲にしても親の慈悲が有るとか無いとか言つて居る間は未だ解かつて居無い、ア、今迄が全く親の慈悲であつたと一點氣が着いて初めて解かつたのである。

けば親は斯くの如きの我を少しも咎め無い、而已ならず其の落ぶれた自分の爲めに色々苦勞心配を爲て下さる。此の親の廣大なる親切に一念氣が着けば——殆ど氣が着くと言つて宜しい、——氣が着いて見れば實に親は廣大の慈悲である、何故今迄自分には之が知れ無つたかと身心に貫徹して初めて親の恩が頂かれるのであります。親は子供の爲めに片時も心配が離れ無い、是は日々の事實です。此の親の親切がア、有り難いと氣が着けば實に親こそ我の生命であります。偕て一旦親の慈悲が解かつてからは最早や前の如き不幸はひとりて出来無く成て仕舞ふ。是は悪い事は爲てはならぬなど、一々自分に考へてする如き間どろしい話では無い、ア、自分が悪るかつたと解るなり心底から沈み渡つて、たとへせよとありても二度と己前の馬鹿が出来無い事に成るのであります。昨日話して來た人の話が丁度然うでありました。其人の言ふ處を聞いて居ると「自分は社會に在る間は常に自分計りえらがつて何でも大きい顔しよう」と勉めて來た。氣着いて見れば人にえらそうにするのが善い杯と誠に馬鹿な處に愚圖々々してたものである、こんな事思ふたのが抑もく間違の初めでありました」と非常に懺悔して居られる。私が「貴方は佛を何う思ふか」と尋ねると「ア、實に有り難い、何ともかとも言ひ方なく有り難い」と喜んで居られるです。其處で私も諸共に「佛陀の慈悲を知つて生活するのが當り前て、今迄佛陀を知らずして生活して居たが本來の間違である。佛陀のみ親は斯くの如くいつても我々に付き添うて居て下さる。我々が且暮此親を思はせて貰へば、抑もく彼是と色々の

昨日も監獄で話して來ました。何うも佛の御力で人が善く事斗りは何うしても人間の力では解りませぬ。一寸でも善いのです、一寸でも人が御慈悲に觸れる時は忽ち佛陀の御恵みがすつきり解つて一邊に信仰に入るやうになるのです、之が自分の力で解る位なら佛陀は要りませぬ。今迄佛とも法とも知ら無いで居た者が、一點ハテ不思議な氣が着いて見る、其中段々と佛陀の味ひが解かつて來て、遂にア、其事か、成程今迄は私が悪うムりましたと頓に信仰に入る事に成るのです。自分が悪いと解かつた時は既に御慈悲が裏に廻はつて居て下さる時である。前に言ふた山伏辨圓親鸞聖人を板敷山で待伏して居ても何うしても逢はれ無い「つらく」緯の參差を案ずるに、願る奇特の事もひあり、是は可笑しいと氣が着いて聖人の草庵へ行かうといふ氣になつたのは既に光明に催ふされて居る姿です。佛陀は久遠の昔より今日今時迄我々を哀れみ我々を恵み親が子の爲めに狂亂する如くに我々に付き纏ふて居て下された。我々は久しい間此の御親を侮り疑ひて親を親とも思はずに來たのであるが、不思議の宿縁で一念難有いと氣が着くなり、親の恵みが忽ち全身に滲み渡つて下されたのであります。

然るに親から金を貰つて居ても當然だと思ひ、何の事も無く之を浪費して居る、そうして親は解かつた、親は金を呉れる者だ杯言つて居る間は少しも親の恩は解つて居無いのである。段々迷ひ迷つた揚句最う仕方が無いと成つて不圖氣が着

事を問題にするのが間違である。廣大の慈悲を仰げば何時でも樂しい」と互に喜ばせて貰うて來ました。かくの如く自覺問題の結局は大覺佛陀の大親の大慈大悲を自覺して、我等の罪惡深重を自覺するの一點になるのであります。

The wave.

“Whither, thou turbid wave?
Whither, with so much haste,
As if a thief wert thou?”
“I am the Wave of Life,
Stained with my margin's dust;
From the struggle and the strife
Of the narrow stream I fly
To the Sea's immensity,
To wash from me the slime
Of the muddy bank's of Time.

Voices of the Night.

聖傳

ジャータカ釋尊傳

四 修行

菩薩出家し給ひて後、七日間アヌーピヤとよべる芒果樹園に過したまひ、救濟の歡喜の中に暮したまへり。而して一日三十リグ隔たれるラージャカハ市に徒歩にて到り、町より町に食を乞ひたまひぬ。全市は彼の麗はしき容貌に驚ろき怪しみて、どよめき渡りぬ。恰かもダーナパーラカの入り來りませるごとく又神々の長の天に入りたまふが如くなりき。

市の衛者等、王に行きて彼の容貌を説きて曰く、「オ、王よ、かくくの人市を通して乞ひつゝあり、我等彼の神なるや、人なるや、蛇なるや、スバンナ(有翼の動物)なるや、また如何なるものなるやを語るあたはず。」と

王、宮より大聖を遙かにみそなはし、驚嘆おくあたはず、乃ち衛者に命を與へて曰ひけるは、「行け、人々、而して視よ、若し彼人に優れたるものならば、市を出づるや直ちに消え去るべし、もし神ならば、空中に去らん、もし蛇ならば地中に入らん、もし人ならば人の如く食を喰ふべし。」と

此時大聖は食の片々を集め身を支ふるに足るだけを得たる時、彼の入りたる門より市を去りたまひぬ。而してバンダバ

といへる岩蔭に東に面して坐し食を喰らひ始めたまへり。されどかゝる食物は嘗て目にだに觸れしことなければ彼の胃は口外に出づるかとはかり苦しく、嘔吐を催さんとして痛く難澁したまへり。されど自ら己を激まして曰く「悉達多よ汝が常食は香れる第三季の米なりき。かゝる生活の状態にありしは眞なり。然れども、汝、一日隱者の服着けし者を見たりしとき、「我かれの如くなりたらんには、食を乞ひて生活せん」とこそおもひしか、而して此目的其物の爲に總てを放棄したりしに今汝のなせる態は何ぞや」と已に打克ちて食ふ能はざる食を喰ひぬ。

王の人々これを見、かへりて事の次第を告げぬ。王これをき、速に市を立ち出て菩薩に近づき、威嚴と徳の純粹なる容貌を見歎斜ならず、彼の王國の總てを捧げんとせり。

菩薩宣はく、「お、王よ我に於ては富も愉快も望まず、たゞ専らに我は總てを抛ちて大覺を成せんことをぞ望むなる。」と王さまに乞ひけれども諾なひたまはざりしかば白さく。

「君は必らず佛陀となりたまふべし、たゞ君佛陀となりたまはば、最初に我が王國に來りたまはんことは容れたまへ」と

大聖は王の乞をゆるし己が道をすゝみたまへり。即ちアララカーラマとウダツカの輩に加りて驚愕の入定の法を得たまへり。されど此法は眞の道ならざるを悟り入定に身をゆだねるを捨て、罪を拂ふが爲に一大苦行を成就せんとて彼の力量と決心を人と神とにあらはし、ウルベラにゆき曰はく、「實に爽快なるかな此地は」とて此處を永き住處としたまひ、大苦行に自身を捧げたまへり。

此時、五比丘即ちコンダンヤ其他は町、市、村、都會、皇都をそこはかとなく乞ひつゝありしが、こゝに菩薩にまみえ奉り、菩薩苦行を修し給ふ間隱家を掃除する等の種々の勤をなし今か今かと佛陀となりたまふ時をまちのぞみつゝ君に仕へまつれり。

菩薩は又最大の苦行を修せんとして麻や米の一粒づゝをとりに身を支へたまへり。されど天使等は命の滴りを集め、彼の皮膚の氣穴より注入せり。

かゝる制裁により彼は骸の如く瘠せ衰へ、嘗て黄金の如くなりし皮膚も今は全く暗黒色となり果て大聖の三十二相もみえずなりぬ。

一日、あなたをなをあゆみつゝ、彼は深き思に沈みたまひしがやがて激しき痛に襲はれて倒れたまへり。天使の或者は云ひはじめぬ、「隱者瞿曇は死しぬ」と。されど他の者曰はく、「こは聖者の常なり」と。されど死せしとおもひし者は王スドホーダナに行きて曰はく、「汝の息子は死しぬ」と。王向ひて曰はく、「彼は佛陀となりて死せしや又其以前に失せしや、」

「彼は佛陀となるべく修せしが能はずして倒れ、大苦行の中途に於て死しぬ」と。されど王これに信を置きたまはずして曰く「われはそを信する能はず、我が息子は悟道に達せずして死すべき筈なし」と。何故王はそを信ぜざりしやと問はんか、そは彼が嘗て驚ろきしジナムブ樹下の奇蹟及び隱者カアラデバラが菩薩に敬意を表せしを見たまひしが故なり。

まことや菩薩は程經て蘇りたまへり、天使は行き王につけ

ぬ。汝の息子は生きたまへり」と。王よと、王は「我息子死せざるを知るなり」と。而して大聖の七年間の苦行は恰かも大鐘の空中に響き渡る如く、廣く宣傳されたり。されど彼苦行は大覺を獲るの道ならざるを前知し、村や町を乞ひつゝ適宜の食を集めて生活し初めたまへりしかば大聖の三十二相は再びあらはれ彼の身體は黄金の色にもかへりぬ。

五比丘もへらく、「此人眞の道を追求せんとせるを、六年間の苦行によりてすらも佛陀となる能はざりき、而して今市に乞ひつゝ滋養ある食を取りなどしては、如何てか其位を獲能ふべき、靈の利益を彼に求めんとするは、恰かも頭を洗はんとして露の滴を集めんとねがへる人の如きものか」と。大聖を見捨て、各自衣服と托鉢を取り十八リグ隔だゝれるインパタナ(ベナレスの郊外、學問を以て名高き處)へ行きぬ。

折しもウルベラに於て、エナーニ村とよべるに一人の娘ありきスジアターといひ地主の家に生れたり。彼女成長してニグロダ樹に祈りて曰く「もし妾同階級の家族に婚し初子に男兒を得たらんには、樹神に捧げんが爲に毎年數千金を費すべし」と而して祈は効果ありき、されば彼女は捧物をなさんのが爲に、恰かも大聖の苦行の第六年五月の満月の夜千四の牝牛を追ひつゝ豊饒なる牧場にゆきぬ、而して彼女は千四の牛の乳もて五百の牛をやしなひ、又かれらの乳もて二百五十の牛を養なひかくの如くして遂に八匹までに至りぬ、かく品質と美味と滋養とを精撰し彼女は所謂順次にミルクを以てミルクを精製することをなせり。而して五月十五夜の日早く、今妾獻物をなすべし」とて朝疾く起きいで、これらの八匹の牝

牛の乳を搾りたり。小牛等は快く、母牛等の乳房より離れてありしかば何の煩もなかりき。而して新らしき桶を置くや否や乳の流れは自らほとぼり出てぬ。此奇蹟を見スジアーターは彼女の手を以て乳を取り、そを新らしき盤に注ぎ入れ手づから火を起して料理し始めたり。ライスマルクの煮えたりし時、大に泡たち廻りしも一滴だに落ちず又失はざりき。又最小の煙すらも爐より立ちのぼらざりき。

其時世界の保護者たる四天王四方より來り爐を守り華嚴なる天蓋を上に掲げぬ。天使長サツカは木片を入れて火を燃やしぬ。かれらの奇しき力により神々は四大陸并に隣島二千餘の天使等を支ふるにたるほどの生命の多くの滴を集め、恰も木の周圍に形づくられたる蜂窠を碎きて蜜を集むるごとく容易くミルクライスの中に注入せり。

スジアーター此日いと多くの不思議のあらはるゝをみて、婢バンナーに曰く、「友なるバンナーよ妾等の神は今日いと慈ふかくおわします。妾嘗つてかゝる奇しき現象を見ず、直ちに往きて聖所を見守れよ」と、賢くみ侍りぬ我が貴女よ」とバンナー直ちに樹下にはしりぬ。

さて菩薩は此日五の夢をみたまへり。其意味を思惟し斷定を下したまへり、曰く、「まことに此日我は佛陀となるべし」と朝疾く彼は沐浴して衣をつけ彼の托鉢の時至るをまち、とくゆきてかへりきたり、樹下に座したまひ、榮光もて樹を輝やかしたまへり。

折からバンナー出て來り菩薩の樹下に座し、東方は燦めき渡り、君の御身より放つ、大光明を以て樹木は悉く金色にみ

下りて浴したまひぬ。而して多くの佛陀によりて着されし羅漢の衣を着し東に向つて座し、飯をパーミラ果の如く四十七玉に作り水なくして悉く食しおはりぬ。此時天使長は一々の塊に生命の滴を入れられたり。此は彼が七七四十九日間の唯一の食なりき。此間食せず浴せず嗽がず、又自然の欲も起したまはず、たゞ深き思惟より起る喜によりて暮しぬ。貴き道より起る歡によりて生きぬ。彼ミルクライスを食し終りて金鉢を取りて曰く、若し我佛陀とならば、水上に行け、もし然らずんば水下に去れとて水に投じぬ。鉢は流に逆らひて駿馬の如く疾く十八キョピット斗り水上に上りて後渦中に沈みカライナーガラージャ(黒蛇王)の宮に至り三佛陀によりて用ひられし鉢に衝き當り其最下に止りぬ。蛇王音をきいて、佛陀は立ちたまへり」と叫び、多くの詩句もて彼を頌讚したり。

菩薩は日中の暑き間は、河の堤の今や花盛なるラーラ樹園に過したまひぬ。而して、夕晩花其花梗にうなだるゝ時、彼は獅子の如く勇み立ちて聖樹の方へ歩み神にまもられて五六百ヤードの道をたどりて進みたまひぬ。此時蛇、有翼の動物、其他人類以上の動物は天より美妙の花を下し又天の歌を捧げぬ、されば大千世界は馨と花輪と讚美の歌もて満ち渡りぬ。

「其時、彼方より、ソツシヤとよべる草刈男數多草を荷なひて來りぬ。而して大聖なるを悟り、草の束八つを捧げたりければ、菩薩これを以て菩提樹下の小高き所に登り其南側に立ち、北方を眺めたまへり。此時南の地平線は最下の地獄の底にある如く北方は天にも達せん斗り高くみえぬ。菩薩、こは佛陀たるべき場所たらざるべしとそをめぐりて西側に至り東

ゆるをみて、彼女はちもひぬ。あゝ今日我等の神は木より降りたまひて、御手づから我等の捧物を受けたまはんとて、こゝに座したまふとみゆ」と歡喜に狂せんばかり喜びて速にかへり來り、スジアーターにつげぬ。

スジアーター新らしき報に歡び、彼女を愛て、娘にふさわしき飾物の總てをあたへて曰く、「今日より以後汝は妾の娘の位置に座せよかし」と、而して彼女は「ミルクライスを金の鉢に入るべし」として百千金の鉢の爲に女を走らせ、其中にミルクライスをつぎ込み恰も蓮葉の上の水の如く鉢をみたしぬ。これをとり金皿もて掩ひ布もてまき自身いと麗はしく装ひ鉢を頭に頂き、恭しくニクラダー樹に至りぬ。

菩薩を見奉るや彼女は彼を樹神とみとり満身の歡喜もて禮しつゝ進み、頭より鉢をとり蓋を除き、又金の壺によき香ある水をつくみて君に捧げ、菩薩の傍に立ちぬ。同時に天使長ギャハチアーラによりて嘗つて彼に與へられし土器は彼を殘して見えざるなりぬ。己の鉢のみえざれば、菩薩右手を延して水をとりましたまひ、スジアーターはミルクライスの鉢を御手に置きぬ、大聖は彼女をみたまへり、彼女食物を指し曰けるは、「あゝ我主よ妾君に獻げしものを受けたまへ、而して妾君のよろこびたまふを見奉りて別れまつらん、妾の歡べるごとく君も歡びたまふべきか」と百千金の金鉢を枯葉にもおとれる如く殘して行きぬ。

菩薩かくして座より立ち上り鉢を取りてネランジャラ川の堤に至りたまひぬ。此處は數千の菩薩大覺の日に下る慣なり。其浴場の名はスバチチチターの渡といふ。鉢を堤に置き川に

に面したまへり。然るに亦西方は無間地獄の底に落ち東方は天に届かん斗りになりぬ。而して彼の立ちたまふ處は車軸を中心として車輪のめぐるが如く、上下に動揺したり。されば菩薩は正しき處ならざるを悟り、直ちにめぐりて南側を至り北方をみやりたまへり。されどなほ以前の如くなりき。菩薩こは佛陀たるべき所にはあらじとて西側に至り東方を面したまひしに東方は佛陀の何れも面したまふ方なれば些かも震へず揺れざりき。大聖曰はく、「こは總ての佛陀によりて擇らばれたる確固たる地盤なり罪を擲つ場所なり」とて草を取り坐に撒きたまひぬ。此等の草葉は畫工又は彫刻者の趣考の及ばざる程微妙なりき。

菩薩御脊を菩提樹の幹に着け御顔を東方に向けて宣まへり。曰く「實に我皮膚、神經、骨は乾き我体の血はあせなんとも我見照せざらんには此座をたゝし」とて百雷を以て鍛へたるが如く確固不動にて跏座したまひり。

物いはぬ四方の歌すらだにも哀れなるかなや親の手を思ふ。いとほしやみるに涙もといまらず親もなき子の母を尋ねる。現とも夢もしらぬ世にしあれば有りて有り頼むべき身か。とにかくに哀れける世にしあればなしともなき世にもふる世の中にかしこき事はかなきと思ひしとけげ夢にぞありけり。

告白

獲信

石津 靜 衛

無學文盲の私が此のやうなことを披瀝致しますのは、いかにも大膽と思ひまして控へて居ましたが、近角先覺より獲信を告白せよとの仰せを蒙り、ありがたく告白いたすことゝなりました。然し何事も如來の御計らひと信知して見ますれば無學の文盲のといふて居られず此のやうな事を綴つたのであります。これを御讀み下さる御方の中に若し御獲信無き御方もありて、これが何かの御縁ともなり只の御一人でも獲信し給ふことあらば私の大願は成就したのです。

私は四月四日の朝略血致しましてそれで肺結核であるといふことが分り非常に失望落胆悶苦痛致しましたが、それが御縁で其後十年來の親友にして素志の醫學を中途で抛ち、數年間佛敎を研究せられ漸く近時獲信せられたる類春雄君に導かれて大悲如來は常に私を照らし給ひつゝありし事を氣就かして貰ひ、近角先覺の御垂示を蒙りて難中之難の大法を信解致し、今日は唯如來の名號を稱へて大悲弘誓の願に報ひ奉る身とならして頂きました。

さて私は廣島の者ですが廣島は眞宗が甚だ盛で、又私の家からも二人も出家得度したのですし、又祖父は八十三歳で四年前に亡くなられましたが幼少より眞宗に歸依して廿何歳とかで獲信せられたそうです。それで私は幼年の頃より佛敎の

事をいろ／＼聞かされ朝晩は必ず佛前にて禮拜をさせられまされたのですが、業因が深かつたといふものか、一つも難有とも勿体ないと思ふ心は起らず叱られる仕方なしに正信偈なども習ふた位です。今となりて考えて見ますれば、これとて佛縁であつたのです。

私は十五六才頃から父と意見が合はなかつたので、それが原となりて家内中は不和の空氣に充たされて何一つ面白くもあふ事はなく、只實の父であるのに何故に私に對してこうであるかと泣いて暮す日が多かつた。其頃の家族は祖父母兩親に私と弟三人妹二人都合十人で、其中祖父一人は不思議にも何時も同じ様子で只何につけても御念佛を申されるばかりで、それは／＼平和の様子でありました。今となりて初めて解かつたのです。それで私も此からますます／＼修養いたしてどうか祖父のやうに平和に日暮しをして見たいと思ふて居ます。

祖父に引かへ私は不平が增長してとても同居して居られず、或夜出奔して廣島の醫者である叔父の許に行きて暫らく居ます中、醫士とならんとといふ志望を起しました。けれど意の如くならず再び無断にて京都へ出立いたしました。情なきかな金品はなくなる、醫家へ薬局生たらんとせしもそれも叶はず、漸々心細くなりて我慢も挫け平素無情と恨らみし父も今となりては戀しくなりました。さりとて今更父の許へ歸られもせず苦心の末廣島の叔父に譯をいふて漸く旅費丈け送りて貰ひ歸國いたせしが、我家へは歸らずして叔父の宅に行きました。此度は懇ろなりし叔父も以前とは違ひ大に御機嫌

嫌悪しく、さん／＼叱られいよく後悔して御詫したのです。二三日経つうち私宅から叔父へ父が急病にて危篤との知らせがあり、大に驚き其儘歸宅して見れば、父は赤痢病に罹りて嘔吐したり下痢したりて苦悶の最中、折も折も母は臨産で惱みて居られ、十三になる弟は水腫病で褥中に難儀して居り、家内は大混雜でした。

其夜母は幸に安産せられました。父の病勢は漸々重くなり、ます故、私は此時こそ眞に父が戀しくなりて今迄不幸せし事の残念に思はれ、充分に御看護なりと致したいものと思へども、傳染病のこと故猥りに近寄ることも出来ず、若しも傍に行かんとすれば父は手を振りて傳染するから來ると申され、ますので、父は矢張り私をこの様に愛して下さるのに今迄は自分の我慢剛情ゆゑに却て恨みし事の愚さよと思ひて、わが身を恨みるにつけ此薄縁を情けなく感じて泣いたのです。其夜遂に亡くなられましたので、母は殊更驚かれて一時は氣を失せられ、弟は病床で泣き出すといふ哀れな有様。私は夢のやうで胸逼り涙も出なかつたのです。父の屍體として傳染病のことなれば私等は近寄ることも出来ず、其掛りの人の手に任すことなれば其儘にて古櫃に納め、荒縄でかゝり早速に持出すので猶更名残り惜しく、家内は泣き叫ぶ聲ばかりでしたが、此時祖父は泣きも悲しみもいたしましたが流石は執着の念も早く晴れると見えて、私等に申されませぬは愁嘆するも今更詮なし、老少不定はこの通りである、子養はんとすれども親待たずとは茲であるぞよ、子たるものは親の存命中に孝行もし又誰も早く安心を決定しておかねばならぬ、年の若き

や身の壯健は當にはならぬと申されましたけれども、其時私にはわが身の無常といふことを感ずるよりも只父の死のみいたく悲しんだのでした。

其後母は産後の肥立悪しく、弟の病氣は漸々重り、父の死去せられしより二ヶ月を経て亡くなりました。それで母は益々悲しみに沈まれて容體は日々衰弱せられます故、廣島の或病院に入れて治療を受けることに致し、其看護は妹に托し、私は其費用の幾分を補ふ爲め避病院に勤務いたしました。母は三ヶ月程にして退院する迄にされました。それで私も避病院を辭して母の介抱や家事の助手をして居りましたが、母は漸々快方に赴かれるにつれて醫學修業の念が再び動き出しました。

家事を祖父に任せて東京に上り専念醫學を研究せしに、幸にも其翌年の春前期試験に及第しましたので、愈々勇氣を得て後期學科を修めて居ましたが、其年の秋國許の母が病氣との知らせに直に歸國すれば、母は肺患に罹りて居られたので非常に落膽いたしました。それも私は亡父には不孝ばかり致したので、せめて母には如何様にいたしてなりとも孝養を盡したきものと思ひ、何とかして全快させたいとの一念は實に束の間も忘れられぬでした。それで看護には祖父が附切りでありますから、暇さへあれば法話をせられて居ました。其時私は未だ未來とか安心とかいふことは左程には思はれませぬでした。翌年の春母は廣島の或る病院に入りて治療を受けました。其間は妹を看護に附けて祖父と私とは二三日宛の交代で看護いたしました事四ヶ月斗りして少しは快いといふので歸宅

して養生いたして居りましたが、七月の初め多量の咯血がありまして夫より頼りに衰弱せられ、其上酷暑の候とて非常に苦惱せられますので、身體益々瘦せ衰えられし其姿を見る度に、私は悲しくなりまして母に見せまいと思ふても涙は出て、何とも話すことが出来ぬのでした。祖父は相變らず法話をいたし安心に就ていると申され、母と同音に名號を稱へて喜んで居られましたが、十月下旬には愈々危篤に逼られ祖父は枕頭に坐して静かに淨土は近づいたとて御念佛を勧められしに、母は合掌して徐に御念佛をいたさるゝ其聲次第に細り行き聞えずなりて、終に往生せられました。其時私は集りた人たちの申される御念佛の聲も遠く聞え、無我無中で涙も出ぬてしたが、暫くして正氣に復へり悲しくて堪へられず、母の屍體に抱き附きて是迄の不孝を御詫びしましたが、其時こそ私の眞心であらうと思ひます。茲まで書いて來ましたら親の慈悲の難有さが考へられ不孝の罪を懺悔いたすにつけても、大悲如來の御計らひで私の様な罪惡深重なものを救ひに御導きの御方便かと思へば、只々ありがたさに涙こぼれて覺えず御稱名いたしました。

其翌年の春東京に出て修學中、五月中旬に又妹病氣との報知故に歸國して見れば、これも肺患でして翌年の春十六歳を一期として亡くなり、其頃より祖母も弱くなりましたが其夏卒中で没せられました。其翌年の秋までは家事を手助けいたして、又もや東京に出て受験の準備して居りしに、三月も経たぬ内に又々弟の病氣で歸國し、間もなく七歳で亡くなりました。今より思へば如此いかに御手引の御手厚きことであり

ませう。

翌年の春又た東京に出ましたが、今度は落着いて勉學が出来るであらふと思ふて居ましたら、其秋となりて今回は祖父が病氣で又々歸國して看病する事になりました。

祖父は平生壯健でありました故、亡くなられる四日前までは毎朝佛壇に禮拜いたされました。それで私を時々枕頭に呼びて申されますには、我は此度淨土に往生するに定まつたのである、最早外にいふ事はないが、此家は佛縁の深きこと故汝も早く安心を決定して佛恩を喜び、法儀を相續いたせ、又如何なる困難に遭ふとも撓むことなく醫學を修業して、成功せよと懇ろに諭されましたが、一々身に浸む心が致し、私は泣いて是まで御苦勞ばかり掛けしことを御詫び致せしに、祖父はなに我に禮をいふに及ばぬ人は世に働きに來たのであるから、どの様な苦しき職業でも喜んで營まねばならぬ、皆如來の御授けであるから不平をいふてはならぬ、汝は早く父母を失ひ弟を失ひ今我亡くならば、只一人の妹あるのみで淋しく思ふてあらふ。又世事に疎きことゝて家事に心配するであらふから不憫に思ふ。併し世間の事の善し悪しは人間には解ることでない、今では汝等不幸に泣くも將來は却て幸福の身となるかも知れぬ故、何事も如來に御任せ申して心配致すな、只何につけても念佛申して喜ばして貰へ、是が我の頼みであると思はれることでありました。かく諭されますので難有さの餘り、何とも申やうもなく伏して泣いた事もあるのです。何につけ角につけ祖父の申される言爲される事は只々感服するの外はないのです。

病氣と申してほかに難義といふ事もなくて日々衰弱せられるばかりで、前にも記せし通り毎朝佛前に禮拜せられる位でありましたが、亡くなられる四日前よりは頼りに衰えられて起床し給はず佛前に香火を供へて呉れと申されて、仰臥のまま念珠を合掌に添へて御念佛を申されしを傍に侍りて伺ひますれば、いかにも尊くもはれました。いよゝゝ臨終に逼られましたら只静かに御念佛を申されつゝ眠るか如くに大往生を遂げられました。

此時私は此世が非常に頼み少く思はれて、淋しく心細くてたまらず、今少し祖父が生きて居て下されたるなら安心の事も懸かして貰ひ、何かにつけて私を引立て貰ふものを、嗚呼明日よりは、くも懸るに教へて下さる人もなし、さて、哀れな身となつたと只なげくばかりでありました。

さてそれよりは経験少きもの、家事を営む事とて、何がやら更に分らず、初めの程は實に困難いたしました。其中に妹は佛ありて或る寺院へ入嫁いたしました。家事は親戚に托し昨年五月東京に出て十月に後期試験に應じましたが、幸に學説だけは及第いたしました。其間に暇さへあれば御念佛を申して居ましたので、不思議なことには或夜兩親の幻影を見た事がありました。十一月には家事の都合上歸國いたし本年の春實地試験に應ずるため上京いたし、頼春雄君を訪ふたのですが、頼君はこれ迄と違ひ誠にこゝして居られましたが、君此度は話すことがあるから聽いて呉れ給へとのことであつた。他でもないが僕の家は君の家と違ひ佛縁は先づ薄い方であるが、それにどういふものか僕は幼少より神佛の影が好きてあつたのである。今より考へればこれが抑々如來の御導きであつたと思ふ。幸に僕は兩親が健在であり僕の身體も可なり體質であり、又所謂失戀といふ事も知らぬけれども、少年の頃より一の大不平があつてそれを忘れたやう諦めやうとすればする程煩悶となり、遂には君の御承知の通りいよいよ例の神經衰弱に陥つたので、君も心配して呉れたこともあるが他から見たら發狂のやうであつたであらう。其様であるから兎ても落着いて醫學を修業する願ひしては、ない、朋友の忠告や他人の批評に耳を傾くる暇もなく、何はさて置き其苦惱を去

らぬことには夜も安眠を得ないのである。それで眞言にも行き法華にも入り臨分い／＼のこゝを造つたてすが、神や佛は私の願ひを聞いて下さらなかつたのです。そんなことでは往々として醫學の方は御留守となりて、父母には叱られ親戚には疎んせられ、朋友には笑はれるし、其苦しさは御察し下さい。それでも婆婆には縁があると思ひ、死なうといふ氣は起らず、假令どんな境遇に陥らうと苦悶の闇を破つて清輝の月を仰がんと願ひわづらふこと實に數年であつた。其間に於いてチラと光りらしきものを見たこともあつたが、それはホンの電光石火で其反動は却つて疑雲は益々密になつて來るので、之ではたまらぬと思ひ、或時こう考へた。一體不平の苦悶のといふは此我といふ軀があるからである。それで此軀を喪くするに限る。それとも死ぬば厭であるから活て居て、軀を喪くすることを考へてい／＼造つて見たが、いかさま道理は解つたやうであるから、そう思ふて見ても矢張軀が喪くなつた氣もせず、煩惱の風は愈々吹きすさむて殆んど失望したのですが、未だ一つ望のあることがあつて、今度は愈々最後の一大事といふ決心で夫に熱申したのですが、憐れやこれも無効となり今度こそは愈々闇黒の窟に陥りて、最早望の綱も切れ果て、悲痛慘憺を極め、泣いてばかり居たのです。此時(三月三日の夜)不圖も大悲如來の御手が降り、光明の輝に引き出して頂きましたので、初めて苦悶の雲霧は何方に去りけん、清涼の月中天に輝き無量の慈光の照りかなるのみ。此時わが身があるが如くなきが如く茫然たるばかりであつたのですが、不思議やこれ迄は強いて稱へし事なき南無阿彌陀佛の御聲口を衝いて出て、只歡喜の涙に咽ぶばかりであつた。今となりますれば是迄の事皆如來の御助けの御手廻してあつた事が解り、否實に如來慈懷中に眠つて居ながら無明の疲れ重くして煩惱の夢覺め難く、如來醒覺の御聲は常に響けども醒くを得なかつたのである。かく如來の慈懷に抱かれてあるを覺ゆれば、此上なとか、わが身の計ひを要すへきぞ、只何事も如來のなましめ給ふ御事を感謝の稱名と共に營まして貰ふのである。世間の善とか悪とか成功とか不成功とか僕は知らぬのである。嗚呼尊とや南無阿彌陀佛である。之につけても祖父は御幸福であつたとの話でありました。それで私は其話を靜に聽いて居りましたか、宿善開發の時が來たといふものか、此度は其話が非常に身に沁み君の境遇が羨ましくなり、二日間も滞在して種々佛法のほなしを聽いたので、君は只自己の計らひを捨て、大悲如來に御任せ申せと勧められるのであつた。これ迄度々聽いたとは異り、かた苦しい理窟はなく

て、只如來大悲の難有き事斗りを話されるので、私もどうかして早く信仰を得たいものであるといふ心が起つたのです。けれどもう速かに得られるものではないとは思ひましても、心が落着かず、他へ下宿しても試験の準備をする氣にもならずして、他方安心の事を書いてあるいろ／＼の書物を求めて讀みましたが、其中「求道の第三卷三號の告白欄に、齋藤たい女史が眞宗の御和讃を讀まれて俄に如來大悲を歡喜せらるゝ御身となられし事のあるを見て非常に心を動かされました。其次に近角常親先生著の懺悔録を拜見しますに、信仰を得たる人の實例といふがあり、夫に某氏は潔白の身でありながら或る疑ひの爲に一時入檻の身となられし際に、近角先生は貴著の「信仰の餘瀝」を贈り給ひしに、某氏は其第一章を讀み頼に信仰を得られ、檻中において猶佛陀の大慈に感泣せらるゝの身となられ、又此方は同檻中の或一人にも感化を興へられて、其人も亦同様の歡喜を味はれし事を載せてあり。之に依て私は時機到來すれば何時乎信仰を得らるゝものと思ひしも、自分では如來といふ事が了解せず、實在せらるゝものなれば其御姿を一度拜したく、拜せし上ならば信じもし御任せもすれど、拜せぬ内は安心して御任せする氣にはなれなかつたのである。それで漸々此念切となり一夜床中に安臥して、胸上に合掌して、どうかチラとにも如來の御姿を拜せんものと、徹夜しましたが、何にも見はなかつたのです。朝になつて身心は疲勞を覺え、頭痛はげしくいたしますので、つまらない事をしたと思ひました。さりとて夫を抛つ氣にもなれず、益々佛書を読み度になりましたので、種々見ましたが宇宙とか涅槃といふ事が非常に面白くなりました。徹夜して見たことありまます。されどこれといふ事も得なかつたのです。

或日頼君を訪ふて前述の事を物語りましたら、君はそうてすか、それも無理ならぬ事です、僕も其様な眞似は何度も遣つたのです。未だそれ位ではない、それは／＼馬鹿氣た事も遣つたのでした。然し其時は眞面目で遣つたのですが、夫も僕には經過であつたので仕方がないのですが、君如來の御姿を拜見せぬとて立派に信仰は得られますよ、確信して見れば見えぬ見ゆる處ではなく如來の慈懷に抱かれて居ることが解りて

是に於てこの人恐懼なく能はず、此藤臺を生命としてたゞれり。されどかくする内に自己の腕の漸く弱り来るを如何せん。この時その腕弱りて彼が下に落つるも待たず、彼は下に落つべくなりぬ。即ち非側より黒白二個の二十日鼠出て來りて、この藤臺を噛み切らんとす、彼之を見て如何ぞ心安きを待べ

とありました、此時こそ初めていか様見るとか、疑ふとか手ぬるい事いふては居られぬと氣付きては怖ろしくなりて、我身の罪といふことが氣になり未來の事が案ぜられ、因果とか極樂地獄とかいふ事が何となくひどく胸をついて、動悸がはげしくなり、今死んだらどうなるであらうと思ふと、身体がぶる／＼と震ふて兎ても圖書館へ行く勇氣はなく、直に引き返して頼君を訪ひ、其事を話せば、イヤそれは結構である、愈々御助けの御手がといたのであると申さるゝ故、さればどうすれば宜しき乎と問へば、さて其處である、兎ても自分の事は何とも出来ませぬ、故に大悲彌陀に一身を御任せ申すのである、此世の縁が盡きたら彌陀如來は弘誓の願船に乗せて彼岸の淨土に運ひて、金剛不壞の身とならしめ給ふのである、といはれるので私はありがたく思ふていひました。最早如來を疑ふとか御姿を見るとか其様な場合でない、速かに如來に依りたいと申せば、それは幸である只自力の計らひを一切捨て給へ、疑はぬ以上は既に其時信じたので、又救濟せられたのである、故に御名を稱へて喜ぶとの事でありました。けれども私は未だ喜ぶといふ迄には行きませぬ。それより涅槃、因果、輪廻、罪惡などの事を問ひましたら、或は圖を畫き又は線を引きなどいたして説明を受けました、漸く道理がさぼるげながら解し得て、其場はいかにもうれしく私はこれで御

ありがたく勿体なくなるのです。それを智識や理論で見やうとか悟らうとするから六ヶ敷のですが、君信てすよ、信じさへすれば如來の存在を疑ふにも疑はれぬやうになり、大悲の恩徳に感泣するやうになるのですが、僕が今如何やうにいふても君がどうしても見ぬ上は信ずる事が出来ぬといふならば、僕はどうすることも出来ぬのですが、實は君は大悲如來の慈懷中に眠つて居る事が、そろ／＼氣がつかして貰ふて居るのですから、見る見ぬといはずに、只稱名歡喜して居らるゝが宜しからうといはれ、又君注意迄に申して置ますが、如來の御姿といふても壇上に安置せられてある偶像ではありませぬ。蓮如上人は木像より畫像、畫像より名號と仰せられてある、一体如來の御姿は人間の目に見えるやうな小さなものではない。又見えぬやうな小さな佛もある。そのやうな事をいひ出すと君むつかしくなるから、兎に角罪惡深重のわれを此身此まゝで救けて下さる御佛は、只彌陀如來ばかりであると確信して外に佛があらうとなからと何であらうと、餘所目を觸らず唱ふる名號が、即彌陀如來であると信じて、只名號を唱え給へ。其中には自然に解つて來るから今一層痛切に如來にすがられるが宜しかろうと思ふ。夫につけて無常觀を味はい給へと、曉鳥敏氏著の死の問題を貸し與へられた。其翌日の朝上野圖書館へ行く道すがら讀みましたに、

人あり茫々たる曠野を行く時、猛虎彼を捕へ害せんとして彼に迫る。彼周草逃れ去らんとするや、忽ち眼まりて井中に落ちぬ。されど其井中に藤臺の横に懸れるあり、彼之にすがりて辛うじて水に沈まざるを得たり。時に井中を見れば懸々たる大蛇あり、紅の舌を巻きかへし落つれば呑まんとするの氣勢、上方を見れば猛虎追ひ來りて井口に吼え、登らば食はんとするの有機。

助を蒙つたのかも知れないと大變に楽しくなりまして此日は辭して歸宅しました。其翌日は何となく二三日前とは違ひ、氣分も大に落着き、如來の御助けとして見れば何も心配することはない、私も随分佛縁は深いのであるからいつかは大安住するであらうと思ひまして、其夜は不思議にも御念佛が申したので、度々稱名しまして久しぶりにて安眠することが出来ました。さて其翌四日は大變です。私は再生したのであります。闇黒界から光明界に生れたのであります。元來私は身體が瘦せては居ました、けれども先づ壯健な方で大患にかゝつた事もなく喜んで居ましたが、近來は非常に精神過敏となりて來たのであります。夫て其朝はどういふものか昨夜安眠せしにも拘はらず未明から咳嗽頻發いたすので寒冒したのであらうと思ふて起床いたし、咯痰しますれば血が混じて居ました。即結核である事を證明したのであります。之を見ると同時に私は實に落膽失望いたしました、立ちても坐つても居られず覺えず倒れて泣きました。即ち、て死の宣告を受けたも同様の氣になり、朝飯を食する勇氣もなく、又もや直様無中で頼君を訪ひ、障子を開くや否や君僕は咯血したよと其儘其處に倒れ、實に失望した、永くは活きられぬ、残念でたまらぬと思はず叫びました。頼君は其時申さるゝには君何をそんな弱い事をいひますか、君は一昨日の話が未だ分らぬと見えますな、如來は其様に手さびしく大悲の御手だてを下し給ふて迄も君を救ひ給ふのである、喜び給へ、肺患になつて早く死んだとて何である、いかな強健な者でも命は朝露の如してある、

であるが、如來に依る身は死はないのである、君もいよく御助けの期が到來したのであるから、何卒一刻も早く大慈を喜はれん事を望むのであるといふて、非常に心配せらるゝので、いかにも親友のありがたさが身に沁みて感泣しました。茲に於て私は力を得て共に誘ふて宿に歸り、夕食をいたしたる中、私は又もやいろ／＼の事を思ひまして胸苦しうなり御飯も咽を下らぬやうになり有耶無耶となり再び伏して泣きました。

頼君は此様な事は言ひ度はなけれども、なんとかして如來大悲の光明中に安住せられたらと思ふ餘りにいふのであるが、君は全體此の米一粒に就ても如來の恩徳廣大なることは味はれるではないか、其他宇宙の森羅萬象は皆如來の慈悲の化現である、蓮如上人は紙屑さへも如來の御物とて頂かれたではないか、又君の身體とて君が勝手に造つたのではあるまい、皆如來大悲常護中の一物ではないか、君克く／＼考へて見給へ、疑はぬの任さぬのといふ處ではない、又因果必然として見れば君が今日迄どれ丈の罪を造りて居ると思ひます。若し之を繪にでも描いて御覽なさい、身の毛も立つ程であります。君は一體それをどう處置する積りですか、只彌陀如來大悲の御助けに依りてのみ其永劫の苦惱の境を脱する事が出来て救され救はるゝのでありますから、それで只御任せすれば宜しいのであると、熱誠を込めていはれるので、私はア、悪るかつたと心から不覺泣き乍ら申しますと、君は其氣が付いたのも只事ではありません、それが既に如來が懺悔せしめ給ふのである。ア、ありがたない事ではありませんか、喜び

と御訓誡を蒙り、又嘆異鈔を親しく御讀みになりて私に御聴かせ給はり、拜聴いたして其尊き其言葉が身にこたへまして益々嬉しくなりました。先生は其上にも貴著の「信仰餘瀝」と尊大人遷化の際に靈感し給ひし「眞實證」を掲げある「求道」を添へて贈られました。私は先生の御情の厚さに感泣いたし、私は何といふ幸福のものであらふ、既に安樂の身となりし上に又もや先覺の温かき御情けを蒙るとは、嗚呼これも如來大悲の御計らひかと思へば、歡喜胸に逼りて御念佛を唱へたのであります。

生來此の様な大歡喜を初めて得ました事とて、氣は有頂天となりまして、先生に對答の禮も定めて欠いた事も多々あつたろうと今更懺悔して居ります。

歸途私は只うれしいといふ念のみに満たされて、身は恰も浮けるが如く見るもの盡くうるはしく思はれて、念佛も自然と口をついて出てありがたく稱へさして頂きました。其足で頼君を訪ふて其事を語りましたら、非常に喜びまして今日よりは共に信後の修養をさして頂きたいものであるとの事、別れて宿に歸り心を沈めて能く／＼考へて見ましても、どうも不思議です。今迄の妄想や苦悶は拭ふが如く何方に去りしか、只喜ばしき斗りて床に入りても眠られず、先生より頂戴せし求道を拜見し嘆異鈔を味はして貰ひます中、はや夜は明けましたので、面を洗ひて室に入りてもいかにもうれしくてたまらず、室内を幾回も覺えず廻りました。朝飯も喫せず直ちに頼君を尋ね其うれしさを話して厚く禮を申しましたら、君は何僕に禮をいふ事はない皆如來の御計ひである故、何に

給へ罪の事などは思ひ給ふな、皆如來が御引受け下さるのであります。如來は此婆娑を離れた其先までも護つて下さるので、餘り御慈悲が廣大なので氣か付かぬは勿體ない事である。夫て誰やらの歌に「浮氣では靡かぬ彌陀の振袖は命ぐるみに打ちこんで見よ」といふのがある通り、君身心共に彌陀に抛つのであるぞとの一言で、私は思はずイカサマと覺ゆると同時に今迄胸の先から咽元まで逼つて居た塊が、一度に解けたやうに引いて身心共にすがすがしくなりました、うれしくてありがたくて堪らず、覺えず頼君に抱き付きて涙に咽ぶ斗り、誠に私は今日まで如來の御懷に抱かれて居ましたのに夫も知らず、今が今迄御慈悲を疑ひ奉りて何とも申譯がありませんでした。實に私は我慢剛情ゆゑ手を換へ品を換へてこゝ迄御導き下されたのであつたのかと思ふと、一層如來のありがたさが身に沁みて、感謝の御稱名を思はず唱へさして頂きましたのであります。君がいふには此事は一大事ゆゑに今一度君が頼せらるゝ御方に此の様子を申し上げて教を乞はれよとの注意で、早速胸に浮びましたのは未だ拜顔は得ませぬが平素敬慕いたす近角先覺に此心事を述べて、高教を仰がんと想ひ、夜中をも顧るに暇なく車を驅せて先生の門を叩きました。其途中身は車上にありながら心は空をかけるが如く、唯早く先生の慈顔に接したきの一念に無中でありました。先生は快く引見を許され温顔を拜する事を得ましたが、只茫然たる斗りて何事を申し上げてよきかを知らざる有様でしたが、漸くにして今夜に於ける我有様を申し上げましたら、先生はそれは結構な事であると喜んで頂き、信後の修養も大事であるぞ

つけても感謝の御念佛を申されよと。又申さるゝやうは君が今夫程喜ばれるのも其筈で苦が樂に急轉せし反動であるから、無理もなければ其有様は永くは續かぬであらう。けれども決して心配し給ふな一旦得たる信仰は最早遁げるの失ふのといふ事は決してありません。又如何様なる事に遭遇するとも如來の御計ひと信知して安住することが出来まますとの事でありました。

其後私は病氣も氣にかゝらず、行先も案じられず、其他何の心配不平もなくいかにも如來に御任せいたした身のありがたさよと歡喜の稱名して、暇さへあれば嘆異鈔を拜讀いたしては喜ばして貰ひ、又日曜日には先覺の御講話を拜聴しては感謝いたして居るのであります。

餘りくだ／＼しくかきまして諸君に御わかりになるかどうかかわかりませんが御推讀を願ふのであります。
獲信見敬大慶喜。 即横超截五惡趣。
唯能常稱如來號。 應報大悲弘誓恩。

ひそかにをもんみれば、人身うげがたく佛教あひがたし。しかるに片州なれども人身をうけ、未代なれども佛教にあへり。生死をばなれて佛果にいたらんこと今まさしくこれ時なり。この度つとめずして若し三途にかへりなば、まことにたからのやまにいたりて手をむなしくして歸らんことなし。なかんづく無常のかなしみはまなこの前にみでり。ひとりとして誰かのこるべき。三惡の火玩はあしのしたにあり。佛法を行せずはいかてか免かれん。みな人心をおなじくして惡に佛道をむもへし。

研究

親鸞聖人著書の特徴

常 観

古聖賢の著書は、後代に残されたる其活ける人格たる事は云ふ迄もない。嘗に其内容が其人格を顯はすのみならず、其体裁夫れ自身が確に人格を顯して居る。今私は親鸞聖人の聖典の撰述法に就て此事を少しく述べて見ようと思ふ。

凡て經文の書き方は、佛が澤山の佛弟子を集めて、佛陀の境界を懇切に説き示し、益々出て、益々深く且つ大なる佛陀の歡喜をなして去るといふ有様は、何れの經文にもあらはれたる佛陀の人格にして、阿含の如き入世適切な説き方より、華嚴の如き佛陀不可思議境を説きたる者に至る迄、凡ての經文に通じたる特徴である。

亦論語を繙く時は、如何にも孔子が弟子に對して、諄々として道を説き仁を教えらるゝ、温乎たる人格が顯はれてある、又プラトリーの對話篇を繙く時は、ソクラテースが其弟子の智能を啓發し、徳を開拓すべく、右より左より或は諷し或は暗示し、親切に至らざる處なき風貌が顯はれてある。斯の如きは何れも弟子の手になりたる著書なれども、其著書の體裁

が儘に古聖賢の面目をよく著はしてある。

偕て後代に至りて苟くも一宗の祖師とも言はるべき人は、確に其著書の體裁に於て其人格が顯はれてある。今吾が親鸞聖人の撰述を拜見し其體裁を伺がふに適切に吾が聖人の人格を認めうるのであります。

先づ聖人撰述の「教行信證」は顯る他に類の無き編纂法であります。既に題號を名けて文類とある如く、本書は畢竟經論釋の中より其要文を抄録したものである。蓋し文類の名より見れば彼の樂邦文類等の風に倣はられたるものであらうか。又經論釋の要文を撰釋して更に私を紛えざる點は確に撰釋集夫れ自身の體裁と見て間違が無いやうであります。併しながら其文類の作り方又は古人の文句を撰釋するやり方の上に儘に一種獨特の處が存するのであります。隨分經論を引用して書物を作ることは世に珍らしい事ではないが、親鸞聖人のやり方は自己の信仰の心絃に觸れたる適切なる文句を思ふに任せ集められたるものである。故に普通人が考へ易き義理を證明せんが爲に聖教量を用いたといふ事て無くて、一言一句信仰の文字を味ひ、之を四法の範疇の下に類聚し給ひたる者である。故に其の引文の一言一句が實に信仰の味の溢れたる文字であります。從て其引文は一經に限らず、苟くも自分の信仰を顯はすに適切なる言あれば皆之を引用し、七祖に於ても聖人の信仰に觸れたる文字ならば少しも拘泥する處なく自由自在に之を切り集め、猶ほ初め華嚴より終り涅槃に至る迄、如來とあれば阿彌陀如來の事信心とあれば如來廻向の信心の事、眞實と云へば彌陀の眞實、涅槃とあれば淨土の眞實と云

ふ筆法で皆集められてある。又畧になれば撰釋集の前後をあげて一部を統轄し之を「行卷」に收め給へる如き、又長さに至りては涅槃經によりて縷々として阿闍世王の煩悶得信の有様を叙し、或は「化身土卷」の日藏經月藏經を引きて日月星辰天神地祇護持養育の有様を述べられし如き、長文の御引用もある。而して是れ皆聖人の信仰の状態を寫されたるものであります。

之を要するに聖人が多年の間聖教を熟讀し給うて、得給ひたる信仰の結晶が文類となりて顯はれたのである。故に引文已外の聖人の御言葉、所謂「御自釋」なるものは顯る飾り無の書き方である。先づ開卷第一に「謹しんで淨土眞宗を案ずるに二種の廻向なり、一には往相、二には還相なり、往相の廻向に就いて眞實の教行信證あり」といひげに何の昧裁もなく書き出してある。各卷の初めが又之と同一の筆法であります。而していつも願名若くは結文等は讚嘆の言を重疊反覆して讚仰措かざる有様である。殊に「行卷」の弘願一乘海の譬喩の如きに至りては、聖人が誓願不思議を渴仰し給ひて、言へる限り言をつくして讚嘆せられてある様子が能く顯はれてある。殊に其讚嘆の言極はまりて最後に「正信偈」の諷咏となりて、茲に三經七祖の眞髓を結晶せしめ、殆んど「小文類」とも言ふべき頌文を以て結ばれたる如きは、實に信仰より溢れたる自然の聲である。又時としては「行卷」の光明名號内外因縁の如き、全く信仰上の眞髓を顯はしてある。又三信字訓の如き、言南无者の如き、一見すれば字引の様なれども、一字々々が皆信仰の味を顯はして、而かも簡潔に信狀を披瀝し給ひたる

など、滴々甘露の味あると言ふもかしこし。「化身土卷」の隱顯釋の如きは觀經の要文を採摘し來りて、直接絶大の光明を示し給ひたる如き、例へば「彼國の淨業成し給へる人を觀ずべし」といひ、本願成就の盡十方无碍光如來を觀知すべしとなり」といひ、又善導の序分義の分類の文句を語讀して、「定善は觀を示すの縁なり、散善は行を顯はすの縁なり」といへる如き、實に寸鐵の味ひあり。其他擧ぐれば様々あれど「教行信證」一に信仰の結晶といふ一言に結歸するなり。

偕て斯くの如く信仰を顯はすに、少しも自家の文字を用ゐずして、全く古聖賢の文句を用ゐ給ひたる處は、聖人が毫も私なき御徳が顯はれてある。從來私は聖人が非凡なる卓見を有し給ひし事を讚仰するの余、凡て聖人のなさるゝ事は著しき特徴を有する事と考へて居つた。然るに今より考ふれば我々より讚じて非凡なりと仰ぐ處は、聖人自身に於ては、最も平凡なる、無造作なる、飾り無き眞面目をむざと顯はされたる様である。例へば「教行信證」と謂へる文字の如きも、當時之用ゐたる有様は「化身土卷」引用の「未法灯明記」の中に「未法の中に於ては教のみありて而も行證なけん」といひ、又后序の始めに「聖道の諸教は行證久しく捨たれ」とある文字によりても明かである。又現に日蓮上人の如きも「教行信證」といへる著述あり。之を以て觀れば教行信證と謂へる言は殆んど當時佛敎の普通の用語であつたらしい。茲へ信の一字を加へて、聖人獨特の「教行信證」が出来たのである。又愚禿といへる稱謂の如きも已に聖覺法印の用ゐられた言通りである。現に聖人としては最も其の信仰を諷咏し給ひたる「和讚」に於てす

ら、聖人が一向新しき文字を用ゐず、華麗なる修飾を爲さず、三經七祖の句文を忠實に假名に直されたる斗りである。殊に『和讃』の淵源とも言ふべき『讚阿彌陀佛偈』を和譯されたる其忠實な事は實に驚くの外は無い。私は嘗て『和讃』が讚嘆の文字としては割合に修飾なく、殊に原文と異なる處なくして、何等の特色を出されぬ事を怪しく感じた。今にして初めて思ふに、聖人は三經七祖已外に別に親鸞が言ふ可き事をもたぬと言ふ私なき處が顯はれてある。最も人の讚仰措かざる「无明長夜の灯炬なり」等「願力無窮にましませば」等「如來大悲の恩徳は」等の三首の如き、聖覺法印の言其儘を何等の私をも加へず、其儘陳べられたのである。夫れが又却て最も多くの後人に感化を興へつゝあると言ふ事は、實に着目すべき點である。蓋し人間が一點の私なき時は最も大なる極である。聖人は「よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」と言へる如く、三經七祖の外に親鸞少しも私を加へずと言へるが、『教行信證』より『和讃』に至る迄の一貫したる聖人の撰述法である。

斯の如く聖人の一點私なき心が直に顯はれて聖人の著作となれる故に、又其上には絶對の大自信が顯はれてある。寧ろ自信といへる言を用ゐるは不適當である。聖人は三經七祖の外に一點の私を紛えぬ信仰なるが故に、其信仰を直寫するに至りては一點の遠慮も無い。世の中に私なき程遠慮なく言顯はす事の出来る事は無い。故に聖人が其引文の取扱にせよ、其點の附け方にせよ、若くは訓話解釋にせよ、聖人が信じて如來の勅命、七祖の本意と信ずる儘を、一點の躊躇なく書か

講義

歎異鈔

近角常觀

第壹章

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には老少善惡のひとをえられず、たゞ信心を要とするべし、そのゆへは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願にてまします。しかれば、本願を信ぜんには他の善も要にあらざる念佛にまざるべき善なきゆへに、惡をもおこるへからず、彌陀の本願をまきたるほどの善なきかゆへにと云云

本鈔十八章の中で初の九章は直接聖人の御言の儘を直々に書き示され、後の九章は當時の異解に對して一々誤謬を指摘されたものである、而して聖人の御言は積極的に其信仰を言ひあらはされたるもので、異解を正されたるは消極的に當時の疑惑を誠められたものである、言ひ換ゆれば前は絶對他力の佛の御はからひを仰がれたるもので後は相對自力の行者のはからひを歎かれたるものである、猶適切に言へば前は誓願不思議を信じたまふ聖人の自督であつて後は誓願不思議を疑ふ定散自力のはからひより來つた當時の間違を正されたのである、固より信仰の書物といふものは初より分類的に順序を追

れたるもの故に、不羈自由の大文字となりて信仰の命が躍如として顯はれてある。私は久しい間聖人の卓見を贊するの余、聖人は三經七祖を自家の活眼を以て自由自在に讀破せられたものと考へて居つたが、こは慥に誤りなき。聖人は三經七祖の眞髓其儘を贊し給ひたる有様が、即聖人の文字に顯はれたのである。聖人が一點の私なき處を遠慮なく言ひ顯はされたのが、今日我々より仰けば、卓見とか何とか見えるのである。一言にして之を盡せば、聖人が述して作らざるも私なき信仰の發現にして、之を述するに破格の筆法の顯はるゝのも又私無き信念の實現である。尙ほ『愚禿鈔』『二門偈』『消息』等に就きては他日の機會に之を譲る。

- 一、よろづ御迷惑にて油をぬされ候はんにも御用脚なく候間、やう／＼京の黒木をすこしつゝ御とり候て、聖教など御覽さぶらう由に候、又少々は月の光にても聖教をあそばされ候、御足をも大概水にて御洗ひ候、又二三日も御膳まいり候はぬ御事も候由承はりなむび候
- 一、蓮如上人仰られ候、本尊は掛けやぶれ、聖教はよみやぶれと對句に仰られ候、
- 一、蓮如上人仰られ候、聖教よみの聖教よまずあり、聖教よまずの聖教よみあり、一文字をも知らねとも人に聖教をよませ聽聞させて信をとらするは聖教よまずの聖教よみなり、聖教よばよめども眞實によみもせず、法儀も無きは聖教よみの聖教よまずなりと仰られ候

（蓮如上人御一代問書）

ふて書きたものではなく、寧ろ心に浮ぶに任せて一つ宛書きならべられたものに違ひなければ、かくの如く自然の間に前半は表面より信を勧め後半は裏面より疑を誠められたものとみてよろしい、聖人が信仰上の實感を傾けられたる和讃の序文とも謂つべき冠頭二首に信を勧め疑を誠めたまひしと畢竟同一轍である、即ち

彌陀の名號となへつゝ、

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

佛恩報するおもひあり。

誓願不思議をうたがひて

御名を稱する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすくとぞのべたまふ。

而して其信するとは何を信するや、其疑ふとは何をか疑ふや、曰く、信するは誓願不思議を信するのである、疑ふとは誓願不思議を疑ふのである、要するに彌陀の誓願不思議が右と左の分れ目である、唯々自分のはからひがなくつて佛の御はからひにまかすのである、其佛の御はからひが誓願不思議である、今第一章に其彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせしるのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなりと眞正面より誓願の不思議の御はからひを信する眞髓を示したまひ、第十章に念佛には無義をもて義とす、不可稱不可説不可思議のゆへにとおほせさふらひきと口をひらきて

誓願不思議の御はからひを疑ふ行者のはからひを斥けたまふ御誠まことに身に泌むばかりである、而して何れも名號念佛をとなへつゝあるのであるが唯其分水嶺は御不思議を信ずるか否やの一點である、而してこれが親鸞聖人の本色とも眞髓とも申すべき點である、教行信證の六軸も、聖人九十歳の勸化も唯此一點である、彼冠頭の二首を拜し奉るに、前も彌陀の名號となへつゝとある、後も御名を稱するとある、唯兩者の分れ目は一は信心まことにうるひとである、一は誓願不思議をうたがひてとある、翻て歎異鈔を見奉るべし、念佛まうさんとおもひたつ、念佛には無義を以て義とす、畢竟根本は一の念佛である、されど彌陀の誓願不思議、不可稱不可說不可思議が信ぜられるか否やが歎異鈔一部の眼目である、故に此第一章は聖人直々の御勸化の眞髓を劈頭より提げられたもので前九章の精神とも言ふべく廣く言へば歎異鈔全體の精神と言ふべき實に其深微妙の大切なる章と申すも決して過言ではな

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとくるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつころのこころとさすなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

法然聖人が往生要集を講じたまひしとき、音吐朗々と讀み上げて、夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足也、道俗貴賤誰か歸せざる者あらん、但し顯密の教法其文一に非ず、事理の業因其行惟れ多し、利智精進の人は未だ難しとせず、予が如き頑魯の者、豈敢てせんや」と讀み上げられたとき、關白兼

彌陀の彌陀たるの點は何れにありや、諸佛平等一如より來りたまふ、何が故に特に彌陀佛として影現したまへる、超世の本願なかりせば彌陀佛たるの要點はない、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつる、嗚呼本願あればこそ彌陀があるのである、其本願あればこそ、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてぬのである、故に此誓願不思議を信じて念佛まうさんと思ひたつ心の起るとき攝取不捨の利益にあづけしめたまふのである。

本願は第十八願である、四十八願一つづつめれば結局衆生救済の第十八願である、而して此願は如何にして出來上りしや、實に五劫思惟、兆載永劫の修行の結果である、私は世上幾多の求道者に向て警告する、諸君は五劫思惟永劫修行の佛陀が如何にして存在するやといへる問題が起りはせぬか、是恐くは多くの求道者か通れぬ門戸であらう、抑々存在するや否やなど言ふは冷かな問題である、かくの如き言を用ゐる人は人間の智慧を標準として佛陀の存在と否とを確かめるつもりである、人間の標準で證明された佛陀なれば佛陀よりも人間の智慧の方が確かなのであらう、何んとなれば人間の智慧が尺度で佛陀は是て計られたものである、此方針ではとても佛陀は計ることは出來なくなる、出來なくなるのが當然である、如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乗の測る所にあらず、唯佛のみ獨り明らかたさとりたまへり、人間の尺度で測られぬが當然である、寧ろ人間相對の尺度で測られぬことが分つてきてから初めて絶対無限の智慧海たることが分かるの

實公は感極まりて冠を地につけ聲を放ちて泣かれたとの事である、如何にも法然聖人が他力念佛に入りたまひたる御手引の往生要集を幼年より御老年まで讀みて讀みて讀み破りて南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と御覺悟の定まりたる後、胸中無量の信念を以て其文を讀み上げられたることなれば如何にありがたきことなりしか、今日想像し奉るだに涙を催す次第である、今我々が實に此歎異鈔開卷最初の祖訓に對するに實に同様の感に堪へざる次第である、

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつころのこころとさすなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり、須らく拜誦し奉るべし、拜誦し奉るべし、實に完璧容易に手を觸るゝを許されぬ次第である、何たる慈悲深き彌陀佛ぞや、何たる偉大なる本願ぞや、何たる深廣なる不可思議ぞや、嗚呼彌陀の誓願不思議實に言ふべからざる我等衆生の爲の力なる哉、聖人一代の教化の特色は實に如來の本願に目をつけたまひし點である、聖人曰く、他力と言ふは如來の本願力也、曰く、聞と云ふは衆生佛願の生起本末を聞て疑心あることなき之を聞くいふ、嗚呼此本願なかりせば我々は何を信ずべき我々は何を力とすべき、法然聖人の仰の如く念佛は力である、されど其念佛は實に選擇本願念佛である、本願なかりせば念佛は無意義である、さればこそ名號不思議は即ち誓願不思議である、私は常に御佛の御慈悲を喜ばして貫て居る、されど御慈悲は如何なる御慈悲であるかといへば我々如き罪深きものを助けんと誓ひたまへる切なる如來の誓願が即ち御慈悲である、抑々

である、故に五劫の思惟永劫の修行は凡夫見地の存在だの何だのといふ位の話ではない、實に無限絶對の大慈悲の顯現である、其大慈悲は即ち此の如き五劫の思惟によりて選擇攝取したまひし超世の大願即ち十方衆生罪惡至極の底下の凡愚をたすけずんば我も自覺して佛陀たるまじとの誓を建てたまひ、不可思議兆載永劫の間に菩薩の行を行したまひしとき、三業の修したまふ所乃至一念一刹那も眞實ならざるなく、清淨ならざることなし、其念力凝つて知らず識らずの間に成佛したまふこと木の火箸を以て火を燃して薪つさざるに火箸の燃盡きたるが如きものである、其成佛の結果が南無阿彌陀佛である、聖人が力をこめて、彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればこそばくの業をもちける身にありけるをたすけんとおぼしたちける本願のかたじけなさよと宣ひ、三信一々味いて我々が不眞實不信心不廻向なるにつけても如來菩薩の行を行したまひし時を回想して如來の眞實、如來の信樂如來の廻向を喜びたまひしは此所である、親の慈悲は親が子の爲に苦勞して下さる事實で分かる、如來は一切の爲に常に慈父母となりたまへり、當に知るべし、諸の衆生は皆是れ如來の子也、世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し、此事實に氣のつくまては親の慈悲が分つた様で分かれぬ、親の實を貫ふときは難有とは言へと其親の苦勞を知らぬうちは眞の難有味を感せぬ、我々は六字名號の寶を得るも其本願成就の御苦勞が分かれぬば佛の御慈悲が徹到せぬ、其名號を聞くといふに、聖人は佛願の生起本末を聞く

と釋されたのも御尤の次第である。

かく佛は何が爲に苦勞したまへる、何が爲に久しく思惟したまへる、何が故に特に選擇本願といふ、如何なる點が超世の悲願である、曰く、五逆十惡謗法闍提の罪惡深重煩惱熾盛の吾人を助けんとの本願である、蓮如上人は實に嚙んでくめる様に本願を示されてある、曰く「阿彌陀如來の仰せられける様は、末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪は如何程深くとも我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと仰せられたり、實に罪は如何程深くともとは如何に廣大無邊なる誓願をや、願力無窮にましますは、罪業深重もあからず、佛智無邊にましますは、散亂放逸もすてられず、世に不思議といひ奇蹟といふこと多けれど、是程の不思議はない、不思議の不思議たる點は是である、蓮如上人御一代開書に法敬坊蓮如上人へ申され候あそばされ候御名號燒申候が六體の佛になり申候不思議なる事と申され候へば、前々住上人その時仰られ候、それは不思議にてもなきなり、佛の佛に御なり候は不思議でもなく候、惡凡夫の彌陀をたのむ一念にて佛になるこそ不思議よと仰られ候なりとある、世に罪惡至極の人間が佛となる程不可思議なることはない。

此の如き彌陀の誓願不思議にたすけらるゝことば疑ふべき餘地を見出すことは出来ない、此本願によりてたすけられて往生を遂ぐるなりと信ずるなど申さるゝも信ぜずには居られぬ様になる「彌陀觀音大勢至、大願のふねに乗じてぞ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよばふてのせたまふ、彌陀の本願は此の如き救の船である、助けの呼聲である、吾人は其願船

起て居ても一分一時も安らかな時はない、罪惡は具足して居る、生死無常の世界である、罪惡も無常も極りである、一點免るべき餘地を残されぬ、此の如き我身の上に彌陀の誓願不思議の願船がある、西岸上の喚聲がある、其願船に助けられて、生死の苦海を解脱して、安樂世界に往生さして下さるのである、故に彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じてとある、又此の如き我等が此の如き喚聲をさかばかく信ぜざるを得ぬのである。

信じてとはたつた一言なれど千萬斤の力である、此の如き力強き誓願不思議あれど、之を信ぜざるかぎりは我力とはならぬ、唯信鈔にある如く、大願業力の綱は下つてあつても信心の手をのべて之をつかまねばたすからぬ、されど此の如き弱き我等、此の如く強き力をさかば之を信ぜずには居られぬ、否々其強き力の爲に信ぜしめらるゝのである、猶さりとめて言へば其御力が我等の上に届いて下さつたのが即ち信ぜられたのである、疑はれぬやうになつたのである、疑はれぬは我力で疑はぬのではない、佛の慈悲が力強きため、疑深き我身が疑ふことの出来ぬやうになつたのである、思へば思へば實に不思議ではないか、今が今迄、彌陀も本願も信ぜられなんだ人が、嗚呼此の如き彌陀大悲の誓願は私一人の爲であるといふことは毫髪も疑ふことが出来ぬ様になつた、そして今が今迄どうかして出離せねばならぬ、是非とも崖を攀ち上らねばならぬと苦しみつゝあつたものが、自分で出離する縁はない、自分の力で上れるものではないと深信すると同時にいつの間にか如來の願船に乗託して貰つた、如來の綱が何時の間

のましますことを聞きたるときは其不思議によりてたすけられて往生を遂ぐるといふことは一點も疑ふことは出来ぬ、若しこれが信ぜられぬものならば、未だ自分が生死の苦海に沈淪しつゝあることに氣づかぬからである、善導大師が吾人の境遇を描かれて「我身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に沈み常に流轉して出離の縁あることなしと深信せよ」と仰せらるゝ、何人も常に口にする文句ゆへ何とも想はずに居る、驚かす甲斐ころなけれ村雀、耳なれぬればなるにぞのる、我等は實に耳なれ雀である、善導大師の此言は千古動かぬ確言である、且つ其一言一句悉く金輪より生へぬきたる巖の如くである、我身は「とは信仰問題の眼目である、是が人並であるなど思ふて居る間は我身は誰よりも惡性罪業の深き凡夫であることは分らぬ、聖人も「そこばくの業を持ちける身」と懺悔したまふのである、さればこそ「親鸞一人が爲なりけり」と喜びたまふことが出来るのである、そして現に是れとは即今現在此私が罪惡を犯し生死に苦しみつゝある凡愚であります、そして氣のつきたるは實に昨今である、されど我等は曠劫の昔より迷ひつゝあるのである、無始の昔より苦しみつゝあるのである、聖人は無始より已來乃至今日今時に至るまでと仰せられてある、實に久遠劫の昔より現在今日に至るまで引續きである、實に現在の苦のみならず前途未來も亦同様の涯底なき生死海である、常に沈み、常に流轉して出離の縁あることなしである、出離の縁あることなしとは實に最終の宣告である、善導大師は我今廻らば亦死せん、住らば亦死せん、去かば亦死せん、一種として死を免れずと言ふてある、

か手にあつた、實に不思議である、不思議を信じて初めて不思議が味はれた、今迄の苦惱が一時に去つた、生死が氣にかゝらぬ様になつた、親の懷に抱かれつゝある心地である、實に身は娑婆にあるも、心は往生を得たのである、有漏の穢身はかはらぬど心は淨土にすみあそぶ、不思議とも不思議とも眞實の不思議である、五濁惡世の有情の、選擇本願信すれば、不可稱、不可説、不可思議の、功德は行者の身にみたり、今まで彌陀の誓願不思議が忽ち我々の胸中に宿つた不可思議となつた、是が金剛信心絶對不二の信である、

此の如く我々が胸中如來の御慈悲を信すれば自から念佛は湧き出づるのである、一たび水ある地層に達すれば自然に水は溢れて滾々として止むときはない、彌陀大悲の誓願を、深く信ぜんひとはみな、ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をとなふべし、少しも計らひを挟まねども自づから念佛は稱へらるゝのである、一念とは信樂開發の時刻の極速を彰す、一たび信樂開發しぬれば自然と多念の念佛は稱へらるゝのである、今は實に其一念の心持をかく適切に示したまひて念佛まうさんと思ひたつ心の起るときと宣ひたのである、「眞實の信心には必ず名號を具す、名號には必しも願力の信心を具せざるなり」口に念佛を稱ふればとて必しも如來の御慈悲を信じたものとは言へぬ、何んとなれば現に誓願不思議をうたかひて御名を稱するひとがある、されど眞實如來の御慈悲を信ずる人なれば、稱ふるなど云ふも稱へずには居られぬ、稱へんと欲して稱ふるにあらずして自から出てくるのである、蔽はんと欲して蔽ふあたはざる有様である、「嬉しさを昔は袖

に包みけり、今宵は身にもあまりぬるかな、感謝の念佛は憶念の源泉より流れ来るのである。「彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひとは、憶念の心つねにして、佛恩報するおもひあり」故に眞實の信心だにあらば口にあらはるゝとあらはれぬとの區別はない、信樂開發の一念に念佛まふさんと思ひたつ心起りて、未だ口に出でざる中に既に業に往生の業事成辨して攝取不捨の利益にあづけて下さるとの適切なる御教訓である、此の如きまはどききりつめた御教訓は歎異鈔でなければ頂くことが出来ぬのである、

攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり、前にも言ひしが如く、攝取してすてたまはざるか、彌陀の彌陀たる點である、本願の本願たる點である、其彌陀本願の方が事實となりて行者の上にあらはれたところである、諸君も知らるゝ如く、聖人は信卷下に信心の現生十種の利益があつてある、若し數へたてたならば無量の徳がある、約めて言へば一つて他を皆こもらせることも出来る、攝取不捨といふは一たび如來の御慈悲を受けたものなればいかにするも如來の慈悲より離るゝことは出来ぬ、一たび光明に照されてみれば、我等は知らねども其光の中より出づることは出来ぬ、煩惱にまなこさへられ、攝取の光明みざれども、大悲ものうきことなくて、つねにわが身を照すなり、かく攝取の心光に攝護せられてみれば、根本の立場が一轉して無明疑惑の間はれて如來の御慈悲は疑はれぬ、ゆゑに時としては貪愛瞋憎の雲霧の爲に覆はるゝことあるも、そは信心を覆ふにすぎざれば、貪愛の波去り、瞋憎の炎退くときは信心白道は金剛不壞である、是即ち「我

能く汝を護らむ水火の二河に墮せんことを恐れざれ」との心光攝護の益である、事實を以て之を言へば人が一たび佛の御慈悲を信じた人は其境遇によりてはあまり喜ぶ心もなくなり、種々の逆境に陥るやうの事ありて一時は信心も消えたと見つるも實に不思議なもので一たび賜はりたる信心は金剛堅固で根底的に亡くすることは出来ぬ、寧ろ自ら之を亡くせんと試みるも亡くすること出来ぬ。御一代聞書に曰く、「有人攝取不捨のことはりをしりたきと雲居寺の阿彌陀に祈誓ありければ夢想に阿彌陀の今の人の袖をとらへたまふに、にげけれどもしかととらへてはなしたまはず、攝取と云はにぐる者をとらへてをきたまふやうなることゝこゝにて思付たり、是を引言に仰せられ候」とある、一たび彌陀の誓願不思議を信ずれば、口に念佛となりてあらはれぬ刹那に、既に此の如き退轉出来ぬ攝取不捨の光益中にれさめいれて下さるぞよとの御祖訓である、



嘆 咏

春の一日

左 千 夫

まかきにを

咲けるいちごや

花白に

清したふとし

柿槐

楓の樹らも

眉まがり

新芽はのびつ

春の日の

天の足日タラシを

あをづとり

朝ゆ囀り

庵こもり

吾居る知れや

庭樹らも

われをなごめや

一人居り

あやに嗜しも

日知釜ヒシツカマ

爐にかけ置き

よき人の

致の文を

聲讀むと

我を無みつゝ

吾聲も

われにたふとく

いや高に

こゝろれもほゆ

釜煮て

さやに音立ち

湯の煙

おほに昇らひ

樂みの

いや湧く時し

眼のあたり

なべての物ら

魂通ひ

吾によらしも

あなたうとあな……

思と述ふ

甲 之

思ひかへせばはや三とせ
「朽ちたる橋をかけ渡す
此世思へ」と醒まされ
さまよふ闇よ眼をあけて
みれば光明かゝやくに
身をたなわすれ歡びき。

「朽葉を搔げば湧く泉
汲めどもつきぬ命ぞ」と
教へかふより二十年を
さまよひ疲れ心くらく
求むる力無かりしに
慈悲は甘露とそゝがれき。

雨の夜風の吹くゆふべ
しづかに集ふはらからと
たふとき慈悲をよろこびて
「今しばしを」と更くる夜を

慈悲の光りをかふじりて
人にも歡び語りなき。

身に近き人世を去りて
残れる人は闇に迷ふ。
この時にして「み佛の
み國は遠く限りなし
後の世あり」とのみさとしに
心しづまり和みにき。

安きがまゝにいにしへの
苦しみ忘れ、むさぼりの
心はつのも、わさわひを
交る人のことごとくに
分ちしことのかをしさよ
行末思へばかなしけれ。

今行末を思ひ見ば
み慈悲たのまず何かせむ。
世に罪深く生れ來て
悲しみ思ふ多ければ
せめて悲しきはらからに
悲しみの歌わかなじ。

蒲公英の花は凋みし葉のかげに黄なる胡蝶の骸葬
りぬ

笹舟に花とりのせて幼児が行く春流す野のいさゝ
川

すきかへし水引き入るゝ田の中の大き土くれげん
くの花

さみどりの山々烟る雨今日の晴れなば春は行かむ
とすらむ

行く春を思ふる人の枕べにありてあせなむおだま
さの花

行く春

八 風

蠶の出つる日は近きぬ春深き雨に芽を吹く桑の枝
々

迷子を探ひと人の打ちひれて芽花ほくけたつ野を
過ぎゆきぬ

遅さくら雨に散り散り花の波若草萌えし山の間
湖

末花もあせぬ種菜の細莢に雄蝶雌蝶の夢さめずあ
れ

おのづから生えし菜の花咲き散りて蝶も來なくて
莢となりなむ

紹介

◎國運と信仰

姉崎正治著

著者は序言は本書發行の精神を叙して左の如く言ふてある
過ぎ去つた二年を回顧して見ると、日本の國運はこの間に一つの大船が急激な
通りぬけたのに似ておる、船長から水夫に至るまで、この間に命懸けの大事
に當つたので、今や我等は疲れた體を休め養ひ、驚いた氣を取り直し、心を落
ちつけて前途の洋々たる大海に乗り出すべき機会に遭遇しておる、この時この
際最も戒むべきは疲れ休みの情氣で、又最も慎むべきは熱考し着手すべきは今後の
方針である。所謂戦後經營の色々の方面には各その専門家の研究も計画も出や
う、こゝで心靈信仰の問題によりて同胞と相刻勵し、直接指示したいといふ熱望
を己れの生命としておる自分にとつては國民の理想と信仰との方面で世に盛く
さなければならぬ。今日以後我國が國運發展の目的とすべき理想其理想に光明
と活力を興へる信仰とに關して、過去二年の大難、奮激の間に處して、靜か
に現當の國民的覺悟を促した自分の論策を集めて同胞に呈するのは敢て僭越の
舉ではなからう。

本論分へて二部とし、第一部は戦争と國運と題し、二十四篇を収む、初めに戦争
外交、宗教、人種等の問題を論じ、トルストイを論じ、戦争と人道、教訓等につ
きてのべ其他時勢の弊を論じ、殊に希臘教會及歐洲の教會につきてのべ、最後に
ロシアの宗教の大體を知らしむるやうにしてある、全體歐洲各國の教會なるもの
は弊も多ければ實際上には力も大なるものである、日本人の様に宗教上理想のみ
に傾きて、實際上の實現に力弱きものは、たしかに西洋の教會を研究する必要が
ある、宗教も其信仰を體現するときは遂にテオクラシーにまで進むものである、
西洋の宗教は國教主義か教國主義の何れを免れない著者は此點につきて餘程國民
に警鐘する所がある第二部は理想と信仰と題して二十篇を収む、不祥事と國民の
覺悟の如き遠慮なく英國の體質強固なる國民性があらはれてある其他國運、文
明、人生等と信仰の關係につきて風切に論じてある、全編約六百頁、裝釘美麗、

〔京橋弘道館發行、正價壹圓〕

◎靈魂論

妻木直良著

篤學にして、當年の高輪大學若手の秀才、妻木直良氏の著である。内容は甚だ
豊富で、先づ總論に於て、諸種の宗教に於ける靈魂の問題や證明を擧げて、簡潔
の間に此研究の甚だ興味ある事を感じしめ、本論は之を四篇に分ち、第一篇に於
ては、佛教以外の外道の我論と、小乗各派の我論とを研究し、第二篇に於ては、
小乗の代表者として有部の業論第三篇に於ては、唯識大乘の阿頼耶識論第四篇に
於ては、直好論の名の下に、三論の無相、實大乘の實相、緣起を論じいづれもそ
の要領を得て居る、我と業とが、阿頼耶とか、無相、實相、緣起とかいふ名目
は、苟くも佛教を研究するもの、先づ逢着する所だが、いづれも意味深くして、
解釋に苦しむ問題で、専門家といへども、難關とする所であるから兎んや手づ
うの研究の大にもあらずものである。今妻木君が、靈魂論の名の下に是等
の教義を、實は佛教哲學の中心骨格たるものを、微細に研究したのは、斯道の爲
に、甚だ喜ばしき所である。是によりて益するものは、内外を問はず、決して少
なからぬ事であらう。是等の諸問題は、否と其宗派の生命とする所て隨て關係
する所も廣いから、業論は章を分つこと四節を分つこと十三の多きに及び、其
中には得非得、中有のごとき解しにくき事をも、骨を惜まずに研究して居る。阿
頼耶識論は、章を分つ三、節を十二、その中には、四分だの、種子だのといふ困
難のものをも、矢張り残りなく研究してある。直好論は、三論、天臺、華嚴、起信
等を一とまとめにしたものであるから、其範圍は極めて廣く、隨て此著の大部を
占めて居り、章を分つこと六、節を分つこと三十二の多きに及んで居る。此中
は勿論三細六塵とか、十好是とか、一念三千とかの、深遠なる教義を、簡略にし
て解し易き様に叙述してある。本論四篇の外に、第五篇として、原始佛教の大體
を叙述し、且つ各篇の下には、參考書目を並列してある事も、初心のものに取
りては甚だ便利なる事であらう。此著は以上の如きものであるから、名は靈魂論であ
るけれども、佛教哲學の中心たるべき所を、徹底的に研究し盡したる、眞學にして有
益なるもので、著者の意見が毫もでないのは、物足りぬ感じがするけれども、現時
の佛教に對する世上の要求は、一定の意見を開かんとするよりも、却りて忠實に
本來の眞相を紹介する所にあらうから、此點に於ては、此著の如きは大に歡迎せ
らるべき底のものである。文章の平易にして、趣味に富んで居る事も、甚だ結構
で、近來此種の著が、漸を追ひ、多く見えて來たのは、何よりも愉快なる事である。
(神田文會堂發行、定價六十七錢)

時報

降誕會

四月は各宗宗祖降誕の聖日多き月なり、一日は親鸞聖人の
降誕日にして眞宗大學に演説會あり、七日は法然聖人の降誕
日にして傳通院に演説會あり、八日は大聖釋尊の降誕日にし
て大日本佛教青年會を初めとして各團體に演説會あり、又寺
々に灌佛會あり、而して十五日には一遍上人の降誕日にして
時宗の企にて錦輝館に演説會あり、此の如く陽春四月、櫻花
爛熳として到る處花ならざるなきの時、歡天喜地諸聖の降誕
を祝す、眞個に是れ春光和融の好時節と謂ふべし。

求道學舎の近況

早櫻晚櫻紛々として落花の雪は庭に満ちて、風吹散華の樂
土を偲ばしむ、佛間に上りて一望すれば滿目の新緑蓊蒼とし
て新思清想湧くが如く清香一炷衆相會して禮拜すれば神聖森
嚴の氣天地に滿つるを覺ふ、近時學舎の消息を擧ぐれば嘗て
出征の山路健之助君は無事凱旋して歸舎し水戸の藤井專隨君
は休暇中來京し、前橋の今井正親君は生徒を帥ひて京阪遠足
の途に出寄り、一昨年大澤講習會にて得信せし昆壹郎君は中
學卒業の翌日を以て母堂と共に來京入舎し、同じく大澤講習
會にて結縁せし強健なる信仰を實驗せる宮澤政治郎君は來京
し、宮澤梅津兩家一族七人熱心に、求道して餘念なく、佛智

不思議の御はからひは悉く自力の立場を翻へして念佛無碍の
一道の力を實現し來る、而して本誌政教時報の初より數年間
一日の如く盡力せられし百日本智健君は今回蒙古内地視察の
旅行に上らる、北京已後寺本婉雅君と其行を同ふする筈、茫
々たる曠原、漠々たる流沙、唯力とすべきは獨り佛陀の冥護
あるのみ、吾人は君が此行によりて心靈上多大の實驗を齎ら
し來らむことを望むこと頗る切なり、冀くば佛天冥々の間に
加祐したまはんことを

女子高等師範學校本年年卒

業の道友

同校に於ける眞摯なる求道の氣運は數年來益々熾にして一
週一日の清閑を割きて毎日曜の講話に來聽せられ、特に第三
日曜の女子信仰談話會に於て歎異鈔の講義を聞き、且つ各自
己の信念を告白して向上修養の道を迎られつゝあり、而して
過去三年已來、年毎道友姉妹卒業の上各地に教鞭を取り、信
念を固くして忠實に其職に盡されつゝあり、而して特に昨年
來は紀念の爲に撮影して相頰り、茶話會を開きて相別るゝこ
となれり、本年亦左記の道友姉妹は萩野教授波佐谷教授近
角家庭と共に學舎の後庭に於て撮影し、眞宗聖典を頒ちて各
其任地に赴かれたり、冀くば慈光長へに諸姉の上に照護あら
むことを。

- 馬場 春子(仙臺東華高) 河口 せい子(堺高専)
- 田島 末子(廣島高専) 津田 三枝子(京都山崎)
- 常光 葵子(女子高等師範學) 大久保たま子(高知高専)

齋藤 さい子 (女山高等)
 齋藤 久子 (高知高等)
 佐伯 みね子 (女山高等)
 須藤 よう子 (浦和高等)

高等師範學校佛教會

同會は五年前創設以來、同校内に於て講義を開き、多数の來聴者相集り、多きは百名以上に上るに至れり、而して其講義繁きときは毎週一回を開會す、最初に釋尊傳を講了し次ぎは歎異鈔を徹講せり、何れも聖人の絶對他力の信仰の剴切にして偉大なるに渴仰せざるなし、蓋し學課繁多なる同校内に於て此の如きは會員熱誠の結果ならずんばならず、今や新學年に入りて新に入會の人多し、乃ち新に「略文類」を講本として毎週一回聖人が簡淨なる文字を味ひ奉らんとす、吾人は此の如き靈的聖典の世上に顯る氣運の來れるを深く感謝する者也。

▲求道學會日曜講話題

- 光國 (三月二十五日)
- 親鸞聖人 (四月一日)
- 大聖釋尊 (四月八日)
- 大覺 (四月十五日)
- 無私の徳 (四月廿二日)
- ▲第二求道會講話題 (三月二十四日)
- 冥認 (三月三十一日)
- 佛智見 (四月七日)
- 世界の光 (四月十四日)
- 信力 (四月廿一日)
- 人生の船筏 (四月廿八日)
- 超世の悲願 (四月廿八日)
- ▲第三求道會講話 (四月二日)
- 忍耐力と信仰

求道會館設立喜捨金
 受領報告(第十四回)

- 一金壹圓也 東京 某 殿
- 一金貳圓也 東京 某 殿
- 一金壹圓也 東京 長尾かず子 殿
- 一金貳圓也 東京 岡田菊僊 殿
- 一金拾圓也 東京 丸茂むね子 殿
- 一金貳圓也 德島 門田勘四郎 殿
- 小計金拾八圓也

通計千九百五拾壹圓三拾八錢也

右御寄附を辱ふし難有奉存候茲に謹んで奉感謝候也

東北三縣 饑饉義捐金 (第三回)

一金貳圓也 越前 西岸寺演說會參詣者御一同

親鸞聖人六百五十回忌紀念豫約出版廣告

親鸞聖人全書

堅四寸四分 横三寸二分
 五號活字
 用紙舶來上等
 印刷鮮明
 九百頁
 全部和譯振假名付 (送發時即)

文學博士南條文雄師監修 眞宗長住田智見師謹輯

●上製 總布クロス背表金文字 入堅牢洋綴寸珍美本

●特製 總黑色柔皮卷背表金文字入 全部和譯振假名付

●八拾錢 豫約 六拾錢 拾錢 美本定價 一圓五十錢 豫約 壹圓 拾錢

●豫約期限 明治三十九年五月三十日限

●全部遺書を網羅し通俗漢文和譯

●可驚な奇怪なる世に親鸞聖人の著書に罪惡救済の根本觀念を深く探ら
 ●親鸞聖人の音血信仰表白紙破れ 程讀める御本書等を色讀趣味するこ
 ●聖人選述の眞精神を發揮し、至難の業にし、絶無なる編者の達識を此難
 ●日本佛教の精華は錘りて本書一部にあり

發行所

京都市東六條 電話三二五八番

法藏館

堂淵文 ● 店書江森 ● 館融光 ● 堂明文京東

馬 醉 木

第三卷第三號要目次

▲沼津千本松原觀音堂(寫真)
▲與謝野晶子の歌を評す
▲散文詩
▲痕のあと(寫生文)
▲無門會(寫生文)
▲身延の山彦(短歌)
▲寒山落木(全)
▲雨 籠(長歌)
▲湖 上(新體詩)
▲無一塵庵歌帖(短歌)
▲滿洲雜詠(全)
▲選歌二百首余
▲茶の湯手帳
▲萬葉集新釋

(每月一回發行)
定價一冊拾貳錢六部
前金六拾九錢一年前
金壹圓卅八錢 郵
稅五 厘 宛

(四月發行)
木村秀枝 寫
左 千 夫
增田八風 譯
長 塚 節
松原祐馬
篠原志都 兒
安 江 不 空
蕨 原 眞
柿 原 眞
左 千 夫
足 立 清 知
左 千 夫 選
四 壁 道 人
左 千 夫

渴して水の味を知るは幼稚なり、飢て食の美を解するは平凡なり、平々の間に趣味を感じ、且々の内に歡喜を得るは、即詩也。

發行所 東京本所茅場町三丁目十八番地 根岸短歌會

近角常觀著

信仰之餘瀝 第七版

定價 上製 二十錢 並製 十五錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區四丁目五番地 文明堂

賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

近角常觀著

懺悔錄 再版

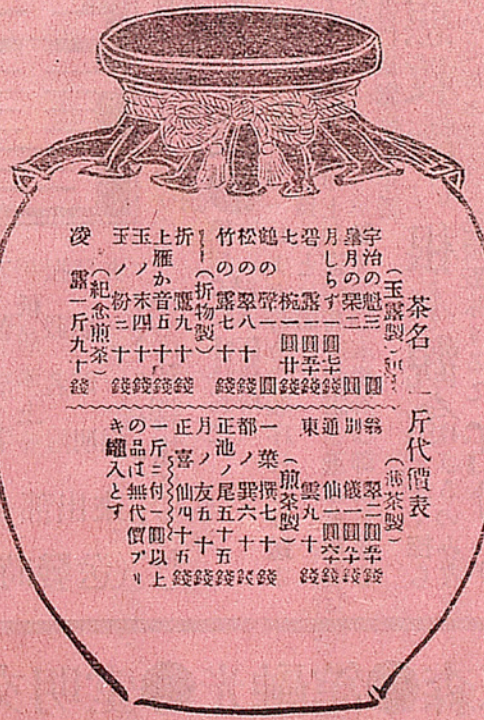
(附録「歎異鈔」)
定價 貳拾錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區春木町二丁目二十一番地 森江分店

賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

◎乍座眞正ノ宇治茶ヲ欲スル人ニ告グ◎
△廉價ノ類似廣告アリ注意アレ△
弊室ハ昔古ヨリ御茶ノ求メニ精シテ進歩ニ伴ヒ家業ヲ開展シ小包郵便ヲ利
用シ直接需用家ノ求メニ精シテ進歩ニ伴ヒ家業ヲ開展シ小包郵便ヲ利
モ今ヤ全クニ製茶ヲ當用セラルル好茶ニハ殆ント萬家ニ達セリ是實ニ弊室ノ光榮
ナリ如此急遽力ニ業務ノ發達セシメテ各地方ニテ求メタルヨリ御愛顧ニ似ル
時下新緑背ニ特ニ本年ハ戦後事業ノ勃興ニツキ増産精製ニ勵ミシ結果一般品質
佳良ナルヲ期シテ本年ハ戦後事業ノ勃興ニツキ増産精製ニ勵ミシ結果一般品質
ニ應ズルヲ期シテ本年ハ戦後事業ノ勃興ニツキ増産精製ニ勵ミシ結果一般品質
任候

新茶賣出 五月十日 小包郵便直接販賣



販賣手續 一、表中ノ茶名ト斤數ヲはがきニテ御通知アレバ直ニ送品ス
二、代金ハ前金ト小包郵便代金引替トス
三、但書 郵海ハ小包一個ニ付金三十錢ノ増稅支御負擔サセテ
草 山城國經喜郡 七碗堂 古川專太郎

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但書 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十九年四月廿七日印刷
明治三十九年五月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

大賣捌所 東京市神田區神保町 東京堂
同 本郷四丁目 文明堂

前號要目

求道

◎人生の歸趣

◎春光和融

感謝

◎人生と往還廻向◎生死問題と人生問題

◎光明の人生◎人生問題と信仰問題◎一

念の信◎和讃

講話

◎懺悔と感謝

聖傳

◎ジャータカ釋尊傳——出家

近角 常觀

告白

◎撮取

講義

◎歎異鈔——歎異鈔の著者

嘆咏

◎蕾の玉(連作短歌)

◎空(長詩)

◎水の響(時報)

◎展墓行

◎長濱佛教青年會◎三河榎前村尙武會◎静岡演說會沼津演說會◎求道會講話題等

岡田 彌作

近角 常觀

左 千 夫

行 泉

甲之 八風